

審査意見への対応を記載した書類（8月）

（目次） 体育学研究科 体育学専攻（D）

1. <設置の趣旨、養成する人材像等の整合性が不明確>

設置の趣旨・必要性について、大学院のカリキュラムと企業をはじめとする社会のニーズとの間にギャップが生じていることを理由として挙げているが、本大学院の養成する人材像等が企業をはじめとするニーズとどのように整合しているかの分析がなされておらず不明確である。また、設置の理由を説明する中で、例えば「多様性を重んじ」「他領域との研究・教育における融合を推し進める」としているが、これらの特色が養成する人材像や教育課程等にどのように対応しているか不明確である。これらの点について具体的に説明すること。（是正事項）…2

2. <ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーと教育課程の整合性が不明確>

ディプロマ・ポリシーの内容が抽象的な内容となっていることに加え、カリキュラム・ポリシーの内容がディプロマ・ポリシーに基づいた教育課程の編成方針・内容・教育方法になっておらず、整合性が不明確である。ディプロマ・ポリシーをより具体的にした上でカリキュラム・ポリシーについて適切に改め、教育課程との整合性について具体的に説明すること。（是正事項）…9

3. <卒業生の社会的需要が不明確>

卒業生の社会需要について、企業等への調査は3件のみヒアリングでの実施となっているほか、各社からのヒアリングでは具体的な数値は示されていない上に、調査先の各企業等は教育・スポーツ系分野の博士号学位取得者を多数採用しているという状況ではなく、社会的需要が不明確である。客観的な数値で具体的に説明すること。（是正事項）…13

4. <学生確保の見通しが不明確>

他大学院の体育・スポーツ系博士後期課程の定員充足状況について、「概ね定員を充足」しているが、実際に過去3年の入学定員の平均充足率が100%を超えているのは3分の2程度であり、必ずしも充足率が高いとは言えない。また、在学生一学年のみに行った進学意向調査の結果においては進学希望者は5名のみにとどまっており、卒業生や社会人等に対する調査も行っていないことから中長期的な需要が見込まれるか懸念がある。これらの事項について、客観的な数値に基づいて具体的に説明すること。（是正事項）…15

5. <既設課程との関係が不明確>

本課程は、既設の修士課程を基礎として設置し、既存の領域の研究内容や高度解析技術を発展させるものとしているが、授業概要やシラバスに記載された具体的な授業の内容では、修士課程の指導からどのように高度化しているか不明確である。既設の修士課程のカリキュラム内容等と比較し、どのように専門性が高まっているのか、他領域との融合をどのように担保しているのか、より詳細に説明すること。（是正事項）…26

6. <研究指導・博士論文審査体制が不明確>

研究指導や博士論文の審査体制において、研究指導教員の決定基準や決定の主体や博士論文の審査に当たる主査の決定基準等が示されていない。また、博士論文審査は学位規程に基づいて実施する旨記載があるが、資料が提出されていない。研究指導・博士論文審査に関係する規程等の資料を提出した上で、これらの点について具体的に説明すること。（是正事項）…65

(是正事項) 体育学研究科 体育学専攻 (D)

1. <設置の趣旨、養成する人材像等の整合性が不明確>

設置の趣旨・必要性について、大学院のカリキュラムと企業をはじめとする社会のニーズとの間にギャップが生じていることを理由として挙げているが、本大学院の養成する人材像等が企業をはじめとするニーズとどのように整合しているかの分析がなされておらず不明確である。また、設置の理由を説明する中で、例えば「多様性を重んじ」「他領域との研究・教育における融合を推し進める」としているが、これらの特色が養成する人材像や教育課程等にどのように対応しているか不明確である。これらの点について具体的に説明すること。

(対応)

審査意見の「設置の趣旨・必要性について、大学院のカリキュラムと企業をはじめとする社会のニーズとの間にギャップが生じていることを理由として挙げているが、本大学院の養成する人材像等が企業をはじめとするニーズとどのように整合しているかの分析がなされておらず不明確である。」との指摘に対して、まず、大学院のカリキュラムと企業をはじめとする社会のニーズとのギャップについて説明する。

「2040 年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～(審議まとめ)」(平成 31 年 1 月 22 日 中央教育審議会大学分科会)には、大学院のカリキュラムと企業をはじめとする社会のニーズとのギャップについて、“特に、博士課程(後期)については、課程を通じて身に付けられる能力が特定の専門分野の知識や方法論であるのに対し、学生の主たる進路先のひとつである企業は、大学院修了者に対して専門分野以外も含めた幅広い能力も求めており、大学院のカリキュラムと企業をはじめとする社会のニーズとの間にギャップが生じているとの指摘もある。”と示されており、大学院修了者に対する企業のニーズとして、特定の専門分野の知識や方法論のみならず専門分野以外も含めた幅広い能力が求められている。このことは、本研究科が博士課程後期の設置に向けて企業等へのヒアリング調査やアンケート調査において、次の通り具体的に現れている。

■企業等へのヒアリング調査(2020年1月実施)

調査団体及び業界における博士学位取得者へのニーズとして、「現在、体育・スポーツ系分野の博士学位取得者はいるものの、専門外についても興味関心を持って学際的な取り組みができる研究者が少ない。今後はプロジェクト研究(連携研究)が主流となっていくため、他分野と連携ができる博士学位取得者のニーズは高まっていくものと思われる。」また、本研究科博士課程後期【設置構想中】に対する要望として、「研究の成果を社会に還元する意思と方法を身につけた人材を求める。」(明治安田厚生事業団 体力医学研究所)が寄せられている。

■企業等へのアンケート調査(2020年8月11日～18日実施)

本研究科博士課程後期【設置構想中】に対する要望として、「先端的な、幅広い科学的知識を習得するとともに、実際の(強化)現場等における課題を見い出し、その課題を解決するために科学的知識を活用できる課題解決力・実践力・応用力、そして、それらの成果を論文等にまとめ、発表できる高い能力を身に付ける教育を行っていただくことを期待します。」(独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセ

ンター（国立スポーツ科学センター）が寄せられている。

以上の結果により、大学院修了者に対する企業等のニーズは、特定の専門分野の知識や方法論のみならず専門分野以外も含めた幅広い能力が求められていることに加え、その能力を実際の現場の課題解決に活かし、研究の成果を社会へ還元できる力であることは明らかである。なお、ここで挙げた具体例は少数であるが、後述する通り、本研究科博士課程後期は、「他領域・他分野との研究・教育における融合を推進し、幅広い知識・考え方を修得して研究の成果を社会へ還元できる人材を養成する」ことを掲げており、企業等へのアンケート調査（2020年8月11日～18日実施）において、「本研究科博士課程後期について、本研究科博士課程後期【設置構想中】が養成する人材は、貴社・貴団体及び業界において必要であると思われますか。」との設問に、きわめて短い期間の調査ながら、15箇所の企業・団体より「とても必要だと思う」、15箇所の企業・団体より「必要だと思う」の回答が得られていることから企業等のニーズは明らかであると確信する。

本研究科博士課程後期は、企業等のニーズに応えるため、養成する人材像を「修士課程の研究内容や高度解析技術を発展させ、他領域・他分野との研究・教育における融合を通じて幅広い知識・考え方を修得し、独創的・創造性に優れた高度な研究能力を備えて専門分野の発展に寄与しつつ、それを社会に還元できる能力を有する人材」としている。

審査意見の「多様性を重んじ」「他領域との研究・教育における融合を推し進める」としているが、これらの特色が養成する人材像や教育課程等にどのように対応しているか不明確である。」との指摘に対して、「多様性を重んじ」「他領域との研究・教育における融合を推し進める」とは、本研究科の学問分野である体育・スポーツ科学の3つの領域（スポーツ文化社会科学領域、スポーツ医科学領域、実践スポーツ科学領域）、そして体育・スポーツ科学以外の学問分野である医学、工学、理学等との交流を通じて幅広い知識と考え方の融合を図ることである。

このことは、養成する人材像における、「他領域・他分野との研究・教育における融合を通じて幅広い知識・考え方を修得する」部分と対応しており、教育課程においては、次の通り対応している。

「スポーツ科学研究理論」において、「本研究科を構成する3領域のみならず、社会を構成する各分野へ広がる視点の育成を図っていく」ために必要な基礎的な力を養う。

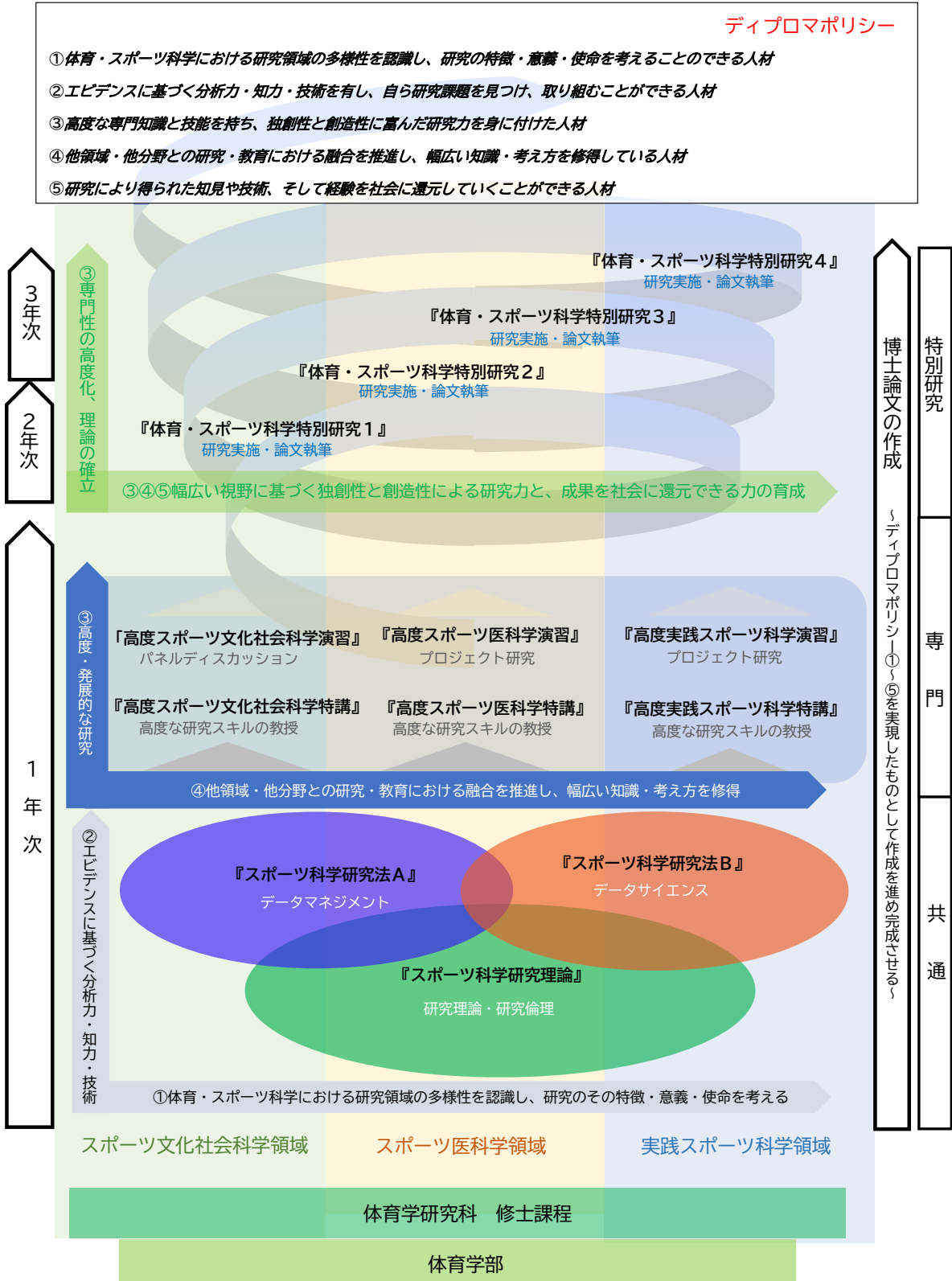
「高度スポーツ文化社会科学特講」「高度スポーツ医科学特講」「高度実践スポーツ科学特講」「高度スポーツ文化社会科学演習」「高度スポーツ医科学演習」「高度実践スポーツ科学演習」において、本研究科の3領域に加え、体育・スポーツ科学以外の他の分野との交流を通じて幅広い知識と考え方の融合を図り、他の分野とのプロジェクト研究、パネルディスカッション等を通じて研究・教育における融合を推し進める。

なお、これらの科目における、他領域・他分野との融合の具体的な内容については、審査意見5の「他領域との融合をどのように担保しているのか」との指摘への対応で説明する。

以上の対応に基づき、「設置の趣旨等を記載した書類」を修正・追記するとともに、養成する人材像、ディプロマ・ポリシーと教育課程との対応関係について明確にすべく、「体育

学研究科体育学専攻博士課程後期 「カリキュラムマップ」を資料として追加する。

資料1 体育学研究科体育学専攻博士課程後期 カリキュラムマップ



新	旧
<p>(2) 博士課程後期設置の理由</p> <p>【社会のニーズ・博士課程後期設置の必要性】</p> <p><略></p> <p>特に、博士課程（後期）については、大学院のカリキュラムと企業をはじめとする社会のニーズとの間にギャップが生じているとの指摘がなされている。</p> <p><u>「2040 年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～（審議まとめ）」（平成 31 年 1 月 22 日 中央教育審議会大学分科会）には、大学院のカリキュラムと企業をはじめとする社会のニーズとのギャップについて、“特に、博士課程（後期）については、課程を通じて身に付けられる能力が特定の専門分野の知識や方法論であるのに対し、学生の主たる進路先のひとつである企業は、大学院修了者に対して専門分野以外も含めた幅広い能力も求めており、大学院のカリキュラムと企業をはじめとする社会のニーズとの間にギャップが生じているとの指摘もある。”と示されており、大学院修了者に対する企業のニーズとして、特定の専門分野の知識や方法論のみならず専門分野以外も含めた幅広い能力が求められている。このことは、本研究科が博士課程後期の設置に向けて企業等へのヒアリング調査やアンケート調査において、次の通り具体的に現れている。</u></p> <p>■企業等へのヒアリング調査（2020 年 1 月実施）</p> <p><u>調査団体及び業界における博士学位取得者へのニーズとして、「現在、体育・スポーツ系分野の博士学位取得者はいるものの、専門外についても興味関心を持って学際的な取り組みができる研究者が少ない。今後はプロジェクト研究（連携研究）が主流となっていくため、他分野と連携ができる博士学位取得者のニーズは高まっていくものと思われる。」また、本研究科博士課程後期【設置構想中】に対する要</u></p>	<p>(2) 博士課程後期設置の理由</p> <p>【社会のニーズ・博士課程後期設置の必要性】</p> <p><略></p> <p>特に、博士課程（後期）については、大学院のカリキュラムと企業をはじめとする社会のニーズとの間にギャップが生じているとの指摘がなされていることから、</p>

望として、「研究の成果を社会に還元する意思と方法を身につけた人材を求める。」(明治安田厚生事業団 体力医学研究所)が寄せられている。

■企業等へのアンケート調査 (2020年8月11日～18日実施)

本研究科博士課程後期【設置構想中】に対する要望として、「先端的な、幅広い科学的知識を習得するとともに、実際の(強化)現場等における課題を見出し、その課題を解決するために科学的知識を活用できる課題解決力・実践力・応用力、そして、それらの成果を論文等にまとめ、発表できる高い能力を身に付ける教育を行っていただくことを期待します。」(独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター 国立スポーツ科学センター)が寄せられている。

以上の結果により、大学院修了者に対する企業等のニーズは、特定の専門分野の知識や方法論のみならず専門分野以外も含めた幅広い能力が求められていることに加え、その能力を実際の現場の課題解決に活かし、研究の成果を社会へ還元できる力であることは明らかである。なお、ここで挙げた具体例は少数であるが、後述する通り、本研究科博士課程後期は、「他領域・他分野との研究・教育における融合を推進し、幅広い知識・考え方を修得して研究の成果を社会へ還元できる人材を養成する」ことを掲げており、企業等へのアンケート調査 (2020年8月11日～18日実施)において、「本研究科博士課程後期について、本研究科博士課程後期【設置構想中】が養成する人材は、貴社・貴団体及び業界において必要であると思われますか。」との設問に、きわめて短い期間の調査ながら、15箇所企業・団体より「とても必要だと思う」、15箇所企業・団体より「必要だと思う」の回答が得られていることから企業等のニーズは明らかであると確信する。

このことにより、学部で培った広い知識や視野を基盤とし、より広域化・高度化する企業を

学部で培った広い知識や視野を基盤とし、より広域化・高度化する企業をはじめとする社会の

<p>はじめとする社会のニーズとのギャップを大学院において、修士課程（博士課程前期）と博士課程後期との連続性による教育研究活動と次に挙げる方策を融合し、実現していくことを目標としている。</p>	<p>ニーズとのギャップを大学院において、修士課程（博士課程前期）と博士課程後期との連続性による教育研究活動と次に挙げる方策を融合し、実現していくことを目標としている。</p>
---	--

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類 6 ページ

新	旧
<p>2) 博士課程後期の養成する人材像 (1) 博士課程の内容（修士課程との関連性） 【修士課程との連動性、養成する人材】 <略> <u>以上により、博士課程後期は、養成する人材像を次の通り定める。</u> ●<u>養成する人材像</u> <u>修士課程の研究内容や高度解析技術を発展させ、他領域・他分野との研究・教育における融合を通じて幅広い知識・考え方を修得し、独創的・創造性に優れた高度な研究能力を備えて専門分野の発展に寄与しつつ、それを社会に還元できる能力を有する人材</u></p>	<p>2) 博士課程後期の養成する人材像 (1) 博士課程の内容（修士課程との関連性） 【修士課程との連動性、養成する人材】 <略></p>

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類 5 ページ

新	旧
<p>【多様性・他領域との融合、独創性・創造性の担保】 <略> これらに定める方策として、本研究科の博士課程後期では、多様性を重んじ、他領域との研究・教育における融合を推し進める。 「多様性を重んじ」「他領域との研究・教育における融合を推し進める」とは、本研究科の学問分野である<u>体育・スポーツ科学の3つの領域（スポーツ文化社会科学領域、スポーツ医科学領域、実践スポーツ科学領域）、そして体育・スポーツ科学以外の学問分野である医学、工学、理学等との交流を通じて幅広い知識と考え方の融合を図ることである。</u> このことは、養成する人材像における、「他領</p>	<p>【多様性・他領域との融合、独創性・創造性の担保】 <略> これらに定める方策として、本研究科の博士課程後期では、多様性を重んじ、他領域との研究・教育における融合を押し進める。 <u>現在、本研究科においては、総合大学の利点を活かし、スポーツ技術向上と健康・体力増進に関する共同研究に取り組んでいる。例えば、医学部と連携して「側彎症プロジェクト（側彎症の手術前後・リハビリ後の運動評価）」、工学部と連携して「義足開発プロジェクト（関節の特性を加味した無動力大腿義足の開発と適合性評価）」、理学部と連携して「スポーツビッグデータプロジェクト（ビッグデータを用いたスポ</u></p>

<p>域・他分野との研究・教育における融合を通じて幅広い知識・考え方を修得する」部分に基づくものであり、これを担保するための教育課程の構造等詳細な説明は、③ 教育課程の編成の考え方及び特色（教育研究の柱となる領域（分野）の説明も含む） 2）教育課程の編成の概要において行う。</p>	<p>ーツ支援システムの開発)」等が実施されており、学術的にも、実践的にも多くの研究成果を上げ、その成果を本研究科の研究教育活動にフィードバックしている。</p> <p>以上の実績を踏まえ、博士課程後期を設置することにより、このような研究活動を自立して推進できる博士レベルの人材育成を連続性をもって進め、体育・スポーツ科学の枠を超えた他領域との融合研究を、さらに活発に実施していくことができると考えている。</p>
---	---

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 8 ページ

新	旧
<p>この目的と先に述べた、養成する人材像と学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえ、本研究科博士課程後期の教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）を以下の通り定め、対応関係について明確にすべく、「カリキュラムマップ」を資料として追加する。（資料 1：「体育学研究科体育学専攻博士課程後期カリキュラムマップ」）</p>	<p>この目的と先に述べた、養成する人材像と学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえ、本研究科博士課程後期の教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）を以下の通り定めている。</p>

(是正事項) 体育学研究科 体育学専攻 (D)

2. <ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーと教育課程の整合性が不明確>

ディプロマ・ポリシーの内容が抽象的な内容となっていることに加え、カリキュラム・ポリシーの内容がディプロマ・ポリシーに基づいた教育課程の編成方針・内容・教育方法になっておらず、整合性が不明確である。ディプロマ・ポリシーをより具体的にした上でカリキュラム・ポリシーについて適切に改め、教育課程との整合性について具体的に説明すること。

(対応)

審査意見に対して、以下のとおり、ディプロマ・ポリシーをより具体的にした上でカリキュラム・ポリシーを適切に改め、教育課程との整合性について具体的に説明する。

修正後のディプロマ・ポリシーは次の通りである。

DP① 体育・スポーツ科学における研究領域の多様性を認識し、研究の特徴・意義・使命を考えることができる。

DP② エビデンスに基づく分析力・知力・技術を有し、自ら研究課題を見つけ、取り組むことができる。

DP③ 高度な専門知識と技能を持ち、独創性と創造性に富んだ研究力を身に付けている。

DP④ 他領域・他分野との研究・教育における融合を推進し、幅広い知識・考え方を修得している。

DP⑤ 研究により得られた知見や技術、そして経験を社会に還元していくことができる。

各ディプロマポリシーに対応するカリキュラムポリシーと教育課程は次のとおりである。

CP①【DP①に対応】 必修科目である「スポーツ科学研究理論」において、体育・スポーツ科学の学際性と領域の広がりをもっとも最先端の研究を通じて学ぶことにより、研究領域の多様性を認識して広い視野を持ち、体育・スポーツ科学に求められる社会課題を考察できる応用的な力を身につける。また、「研究・教育に必要な正義感・倫理観」を身につけ、「博士論文の作成と成果の社会への還元を目指し、専門性を高めていく」ことに加え、「本研究科を構成する3領域のみならず、社会を構成する各分野へ広がる視点の育成を図っていく」ために必要な基礎的な力を養う。⇒「スポーツ科学研究理論」の修得

CP②【DP②に対応】 「スポーツ科学研究法」を置き、自らの研究を社会に還元するために必要な技術として、データマネジメント並びにデータサイエンスの最新の概念や研究方法を学修し、エビデンスに基づく分析力・知力・技術をもって、課題発見力を養う。⇒「スポーツ科学研究法A」、「スポーツ科学研究法B」の修得

CP③【DP③に対応】 体育・スポーツ科学の3領域(スポーツ文化社会科学領域、スポーツ医科学領域、実践スポーツ科学領域)の特講科目及び演習科目の学びを通じて、高度な専門知識と技能、研究スキルを習得し、「特別研究」科目において独創性と創造性に富んだ研究力を身に付ける。

⇒「高度スポーツ文化社会科学特講」、「高度スポーツ医科学特講」、「高度実践スポーツ科学特講」、「高度スポーツ文化社会科学演習」、「高度スポーツ医科学演習」、「高度実

「実践スポーツ科学演習」の修得

「体育・スポーツ科学特別研究1」「体育・スポーツ科学特別研究2」「体育・スポーツ科学特別研究3」「体育・スポーツ科学特別研究4」すべての修得

CP④【DP④に対応】 体育・スポーツ科学の3領域（スポーツ文化社会科学領域、スポーツ医科学領域、実践スポーツ科学領域）の特講科目及び演習科目の学びを通じて、体育・スポーツ科学以外の他分野と研究・教育で融合できる力を養成する。

⇒「高度スポーツ文化社会科学特講」、「高度スポーツ医科学特講」、「高度実践スポーツ科学特講」、「高度スポーツ文化社会科学演習」、「高度スポーツ医科学演習」、「高度実践スポーツ科学演習」の修得

「体育・スポーツ科学特別研究1」「体育・スポーツ科学特別研究2」「体育・スポーツ科学特別研究3」「体育・スポーツ科学特別研究4」すべての修得

CP⑤【DP⑤に対応】 研究指導教員により、1年次から博士論文の作成に向けて指導を開始し、2年次から3年次にかけて、「特別研究」科目において継続して指導することにより、博士論文の作成を通じて、研究成果の社会への還元できる力を養う。

⇒「体育・スポーツ科学特別研究1」「体育・スポーツ科学特別研究2」「体育・スポーツ科学特別研究3」「体育・スポーツ科学特別研究4」すべての修得

以上の内容に基づき、「設置の趣旨等を記載した書類」において、DP・CPを記載し、併せて『学修成果の評価方法（博士論文審査基準）』を修正した。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類 7～10 ページ

新	旧
<p>【学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）】 博士課程後期では、本学の学位授与の方針に従い、以下の知識・技能・能力を備えたと認められるものに学位を授与する。</p> <p><u>DP① 体育・スポーツ科学における研究領域の多様性を認識し、研究の特徴・意義・使命を考慮することができる。</u></p> <p><u>DP② エビデンスに基づく分析力・知力・技術を有し、自ら研究課題を見つけ、取り組むことができる。</u></p> <p><u>DP③ 高度な専門知識と技能を持ち、独創性と創造性に富んだ研究力を身に付けている。</u></p> <p><u>DP④ 他領域・他分野との研究・教育における融合を推進し、幅広い知識・考え方を修得している。</u></p>	<p>【学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）】 博士課程後期では、本学の学位授与の方針に従い、以下の知識・技能・能力を備えたと認められるものに学位を授与する。</p> <p><u>1) 体育・スポーツ科学領域において、専門的な知識と技能を有し、問題解決に向けて、より幅広い視野と高度な技能をもち、研究・教育活動を通じて積極的に社会貢献ができる。</u></p> <p><u>2) 研究及び教育に携わる者として必要な正義感・倫理観を有し、豊かな教養と人格を身につけ、人材育成を行うことができる。</u></p> <p><u>3) 当該分野における国内外の学会等での発表、質疑応答が可能な、課題解決を目指す積極的な姿勢と、それに実際に対応できる能力を有している。</u></p> <p><u>4) 当該分野における極めて高度な知識・技能を有し、独創性・創造性に富んだテーマを持って研究を遂行できる</u></p>

<p><u>DP⑤ 研究により得られた知見や技術、そして経験を社会に還元していくことができる。</u></p> <p><略></p> <p>【教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）】</p> <p><u>ディプロマ・ポリシーに掲げた能力を有する人材を養成するために、以下の方針に基づいた教育プログラムを実施する。</u></p> <p><u>CP① 必修科目である「スポーツ科学研究理論」において、体育・スポーツ科学の学際性と領域の広がり最先端の研究を通じて学ぶことにより、研究領域の多様性を認識して広い視野を持ち、体育・スポーツ科学に求められる社会課題を考察できる応用的な力を身につける。また、「研究・教育に必要な正義感・倫理観」を身につけ、「博士論文の作成と成果の社会への還元を目指し、専門性を高めていく」ことに加え、「本研究科を構成する3領域のみならず、社会を構成する各分野へ広がる視点の育成を図っていく」ために必要な基礎的な力を養う。</u></p> <p><u>CP② 「スポーツ科学研究法」を置き、自らの研究を社会に還元していくために必要な技術として、データマネジメント並びにデータサイエンスの最新の概念や研究方法を学修し、エビデンスに基づく分析力・知力・技術をもって、課題発見力を養う。</u></p> <p><u>CP③ 体育・スポーツ科学の3領域（スポーツ文化社会科学領域、スポーツ医科学領域、実践スポーツ科学領域）の特講科目及び演習科目の学びを通じて、高度な専門知識と技能、研究スキルを習得し、「特別研究」科目において独創性と創造性に富んだ研究力を身に付ける。</u></p> <p><u>CP④ 体育・スポーツ科学の3領域（スポーツ文化社会科学領域、スポーツ医科学領域、実践スポーツ科学領域）の特講科目及び演習科目の学びを通じて、体育・スポーツ科学以外の他分野と研究・教育で融合できる力を養成する。</u></p>	<p><u>5) 理論的枠組み及び方法論が確立されており、学界への貢献が認められる。</u></p> <p><u>6) 研究により得られた知見や技術、及びその過程で得られた経験を社会へ還元できる能力が認められる。</u></p> <p><略></p> <p>【教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）】</p>
--	--

<p><u>CP⑤ 研究指導教員により、1年次から博士論文の作成に向けて指導を開始し、2年次から3年次にかけて、「特別研究」科目において継続して指導することにより、博士論文の作成を通じて、研究成果の社会への還元できる力を養う。</u></p> <p><略></p> <p>『学修成果の評価方法（博士論文審査基準）』博士課程後期では、博士論文の審査を以下の基準に基づき行う。</p> <p>1) 研究目的と考察が適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>研究の目的が明確であり、独自性が認められる。</u> ・ <u>先行研究を十分に検討して課題を明確に指摘している。</u> ・ <u>研究の目的に対応した考察がなされており、学術的、実践的な課題が抽出できている。</u> <p>2) 研究の方法と論文の構成が適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>研究目的を達成するための方法が最新で高度なものであり、方法に対して熟達していることが認められる。</u> ・ 論文の構成が明確である。 <p><略></p> <p>5) 方法論の確立がなされ、学界への貢献ができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 当該研究領域において方法論に対する新たな提言がなされている。 ・ 当該研究領域において <u>研究の成果が論文としてまとめられることによって学界への貢献ができる。</u> <p>6) 社会への還元ができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>研究テーマや成果が社会に還元できる可能性を有している。</u> ・ <u>研究により得られた最新で高度な研究方法や他領域の研究成果を学ぶことで、連携の重要性を認識して、社会に還元できる可能性を有している。</u> 	<p><略></p> <p>『学修成果の評価方法（博士論文審査基準）』博士課程後期では、博士論文の審査を以下の基準に基づき行う。</p> <p>1) 研究目的と考察が適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究の目的が明確である。 ・ 先行研究を十分に検討している。 ・ 研究の目的に対応した考察がなされている。 <p>2) 研究の方法と論文の構成が適切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究目的を達成するための方法が適切である。 ・ 論文の構成が明確である。 <p><略></p> <p>5) 方法論の確立がなされ、学界への貢献ができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 当該研究領域において方法論に対する新たな提言がなされている。 ・ 当該研究領域において学界への貢献ができる。 <p>6) 社会への還元ができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>研究により得られた知見や技術を社会に還元できる可能性を有している。</u> ・ 研究により得られた能力を社会に還元できる可能性を有している。
--	---

(是正事項) 体育学研究科 体育学専攻 (D)

3. <卒業生の社会的需要が不明確>
 卒業生の社会需要について、企業等への調査は3件のみヒアリングでの実施となっているほか、各社からのヒアリングでは具体的な数値は示されていない上に、調査先の各企業等は教育・スポーツ系分野の博士号学位取得者を多数採用しているという状況ではなく、社会的需要が不明確である。客観的な数値で具体的に説明すること。

(対応)

審査意見に対して、博士課程後期修了生の社会需要に対する企業等へのアンケート調査を実施した。

アンケート調査の結果、企業等やその所属する業界において、本学博士課程後期が養成する人材が「とても必要だと思う」「必要だと思う」という回答が30件得られ、本学博士課程後期が養成する人材の必要性を認める結果となった。さらに、修了者について17箇所の企業等が「採用したい」とし、本学博士課程後期の入学定員3名を大きく上回る結果となり、企業等において、体育・スポーツ系分野の博士学位取得者の人材需要があることが明確となった。

以上の対応に基づき、「学生確保の見通し等を記載した書類」を修正・追記し、「東海大学大学院体育学研究科体育学専攻（博士課程後期）の設置に関するアンケート調査 集計結果（人材需要に関する調査）」を追加する。

東海大学大学院体育学研究科体育学専攻（博士課程後期）の設置に関するアンケート調査 集計結果 (人材需要に関する調査)			
調査対象 : 博士課程後期修了者の採用が想定される企業・団体			
調査実施期間 : 2020年8月11日(金)～18日(火)			
調査依頼数	52		
有効回答数	34		
設問		件数	全体%
設問1.	貴社・貴団体名をお知らせください。		
	株式会社、公益財団法人、社会福祉法人 等	—	—
設問2.	本アンケート回答者様のご所属・役職をお知らせください。		
	代表取締役、人事部長、総務部主任 等	—	—
設問3.	貴社・貴団体の業務内容・活動内容を差し支えない範囲でお知らせください。		
	スポーツ・身体活動に関する調査研究、競技および生涯スポーツの推進 等	—	—
設問4.	東海大学大学院体育学研究科体育学専攻（博士後期課程）【設置構想中】が養成する人材は、貴社・貴団体及び業界において必要であると思われませんか。		
	とても必要だと思う	15	44.1%
	必要だと思う	15	44.1%
	あまり必要でないと思う	0	0.0%
	必要でないと思う	1	2.9%
	わからない	3	8.8%
設問5.	東海大学大学院体育学研究科体育学専攻（博士後期課程）【設置構想中】の修了者を採用したいと思われませんか。		
	採用したい	17	50.0%
	採用したいと思わない	1	2.9%
	わからない	16	47.1%

(新旧対照表) 学生確保の見通し等を記載した書類 7 ページ

新	旧
<p>2) 企業等における人材需要 <略> ヒアリング調査の結果、企業等において、体育・スポーツ系分野の博士学位取得者の人材需要があることが分かり、求める人材像として、「研究成果を社会に還元できる人材」が示された。この人材像は、本学博士課程後期の養成する人材と合致している。</p> <p><u>このヒアリング調査に加え、本学博士課程後期の修了生に対する企業等の採用のニーズがどの程度あるのかを具体的に探ることを目的とし、企業や団体に対して本学博士課程後期が養成する人材の必要性及び修了した人材の採用意向等について回答を求めるアンケート調査を行った。(資料8)</u></p> <p><u>アンケート調査の結果、企業等やその所属する業界において、本学博士課程後期が養成する人材が「とても必要だと思う」「必要だと思う」という回答が 30 箇所の企業等から得られ、本学博士課程後期が養成する人材の必要性を認める結果となった。さらに、修了者について17箇所の企業等が「採用したい」とし、本学博士課程後期の入学定員3名を大きく上回る結果となり、企業等において、体育・スポーツ系分野の博士学位取得者の人材需要があることが明確となった。</u></p> <p>以上により、本学博士課程後期の設置は、社会的な人材需要及び企業等における人材需要の動向を踏まえている。</p>	<p>2) 企業等における人材需要 <略> ヒアリング調査の結果、企業等において、体育・スポーツ系分野の博士学位取得者の人材需要があることが分かり、求める人材像として、「研究成果を社会に還元できる人材」が示された。この人材像は、本学博士課程後期の養成する人材と合致している。</p> <p>以上により、本学博士課程後期の設置は、社会的な人材需要及び企業等における人材需要の動向を踏まえている。</p>

(是正事項) 体育学研究科 体育学専攻 (D)

4. <学生確保の見通しが不明確>

他大学院の体育・スポーツ系博士後期課程の定員充足状況について、「概ね定員を充足」しているが、実際に過去3年の入学定員の平均充足率が100%を超えているのは3分の2程度であり、必ずしも充足率が高いとは言えない。また、在学生一学年のみに行った進学意向調査の結果においては進学希望者は5名のみにとどまっており、卒業生や社会人等に対する調査も行っていないことから中長期的な需要が見込まれるか懸念がある。これらの事項について、客観的な数値に基づいて具体的に説明すること。

(対応)

審査意見「他大学院の体育・スポーツ系博士後期課程の定員充足状況について、「概ね定員を充足」しているが、実際に過去3年の入学定員の平均充足率が100%を超えているのは3分の2程度であり、必ずしも充足率が高いとは言えない。」との指摘に対し、「関東圏の大学について、概ね定員を充足している」こと、また「関東圏の大学院の体育・スポーツ系博士後期課程への進学需要は高い傾向にある」ことを追記・修正する。

審査意見「在学生一学年のみに行った進学意向調査の結果においては進学希望者は5名のみにとどまっており、卒業生や社会人等に対する調査も行っていないことから中長期的な需要が見込まれるか懸念がある」との指摘に対し、2019年12月に修士課程1年生へ行った博士課程後期への進学意向アンケート調査に加え、2020年度修士課程1年生、体育学部1～4年生（修業年限超過者含む）及び修士課程修了生（社会人）へも同様の調査を実施した。

アンケート調査の結果は、次のとおりとなった。

■2020年度修士課程1年生への進学意向のアンケート調査

2020年5月、博士課程後期の基礎となる体育学研究科体育学専攻修士課程1年生に対して進学意向のアンケート調査を実施した。

その結果、本学大学院博士課程後期への「進学を希望する」と回答した学生は3名であり、設定する入学定員に達した。

■学部生への進学意向のアンケート調査

2020年5月、体育学部の1～4年生（修業年限超過者含む）に対して進学意向のアンケート調査を実施した。

まずは修士課程への進学希望を問う設問に対し、「進学を希望する」と回答したのは次のとおりであった。

4年生以上（修業年限超過者含む）は6名、3年生は3名、2年生は1名、1年生は0名。

学年が上がるほど進学希望者が多くなっており、これは高学年になるほどゼミナールや卒業研究を通じ自身の研究活動の進捗や取り組む意欲が高まっているため、学部で行った研究を修士課程においても継続したいと考える学生が増えるためと考えられる。2020年度は本学においても新学期開始がゴールデンウィーク明けであった。4年生以上においては新学年開始直後の段階で明確に修士課程への進学希望を示した学生が6名おり、今後卒業研究等が進むにつれ、研究活動への意欲の高まりから、進学希望者が増えることが見込まれ

る。

続いて博士課程後期への進学希望を問う設問に対し、4年生以上では「進学を希望する」と回答したのは1名であった。しかし、前述のとおり修士課程に進学後、さらに研究活動を継続させていくことで博士課程後期への進学意欲が向上することが見込まれる。後述する「進学説明会」において博士課程後期における研究活動のイメージを明確し、説明内容を充実化させることで、特に「進学先の1つとして検討する」と回答した7名(4年生以上)を中心により進学希望者を拡充させることは可能であると考え。

また、3年生は現時点で博士課程後期へ「進学を希望する」の回答者が3名おり、上述のような取り組みでさらに段階的な進学希望者の拡充を達成することができると考える。

■ 修了生への進学意向のアンケート調査

2020年8月、修了生(修士課程を修了し、すでに社会人となっている者)53名に対して進学意向のアンケート調査を実施した。

結果、「あなたは、設置構想中の体育学研究科体育学専攻(博士課程後期)が開設された場合、今後、進学を希望しますか?」の設問に、「進学を希望する」と回答した者が5名に達した。

これまでの進学意向アンケート調査の結果をまとめれば、次の通りとなる。

〈2019年12月実施〉修士課程1年生(現在修士課程2年生)【博士課程後期開設年度進学対象】への調査では、「進学を希望する」5名。

〈2020年5月実施〉修士課程1年生【博士課程後期開設2年度進学対象】への調査では、「進学を希望する」3名。

〈2020年5月実施〉学部4年生以上【博士課程後期開設完成年度進学対象】への調査では、「進学を希望する」1名、「条件が合えば進学を希望する」0名、「進学先の1つとして検討する」7名。

〈2020年5月実施〉学部3年生【博士課程後期開設4年度進学対象】への調査では、「進学を希望する」3名、「条件が合えば進学を希望する」7名、「進学先の1つとして検討する」10名。

以上の結果に、修了生(社会人)の「進学を希望する」5名を加えれば、博士課程後期が設定する入学定員3名は、中長期的に、継続的に確保できることが見込まれる。

以上の対応に基づき、「学生確保の見通し等を記載した書類」を修正・追記し、修士課程1年生・学部1～4年生(修業年限超過者含む)・修士課程修了生それぞれを対象とした「東海大学大学院体育学研究科体育学専攻(博士課程後期)の設置に関するアンケート調査 集計結果」を追加する。

**東海大学大学院体育学研究科体育学専攻（博士課程後期）
の設置に関するアンケート調査 集計結果**

調査対象：東海大学大学院体育学研究科体育学専攻（修士課程）1年生

調査実施期間：2020年5月11日（月）～31日（日）

調査対象者数	14						
有効回答者数	14						
設問						件数	全体%
設問1.	修士課程修了後の進路についてどのように考えますか？					14	
	1	博士課程へ進学したい、または検討している				7	50.0%
	2	就職したい				4	28.6%
	3	未定				3	21.4%
設問2.	【設問1に対して、1を選択した方のみ】 博士課程へ進学したい、または検討している、と考える動機は何ですか？（複数選択可）					7	
	1	博士の学位を取得するため				5	35.7%
	2	研究職に就きたいため				4	28.6%
	3	より高度な知識を身につけ、社会で活躍するため				0	0.0%
	4	その他				0	0.0%
設問3.	【設問1に対して、1を選択した方のみ】 設置構想中の本学の体育学研究科体育学専攻（博士課程後期）への進学を希望しますか？					7	
	1	進学を希望する				3	21.4%
	2	進学を希望しない				0	0.0%
	3	未定				4	28.6%

東海大学大学院体育学研究科体育学専攻（博士課程後期）
の設置に関するアンケート調査 集計結果 1/2

調査対象 : 東海大学体育学部 1～4年生（修業年限超過者含む）
調査実施期間：2020年5月11日（月）～31日（日）

調査対象者数	1898						
有効回答者数	651						
設問						件数	
設問1.	あなたの学年を教えてください。					651	
1	1年生					290	44.5%
2	2年生					40	6.1%
3	3年生					164	25.2%
4	4年生以上					157	24.1%
設問2.	あなたの所属学科を教えてください。					651	
1	体育学科					198	30.4%
2	競技スポーツ学科					133	20.4%
3	武道学科					101	15.5%
4	生涯スポーツ学科					142	21.8%
5	スポーツレジャー・マネジメント学科					77	11.8%

東海大学大学院体育学研究科体育学専攻（博士課程後期）
の設置に関するアンケート調査 集計結果 2/2

調査対象者数	1898								
有効回答者数	651								
設問3.	学部卒業後の進路についてどのように考えますか？								
		1年生	2年生	3年生	4年生以上	合計	全体%		
1	大学院へ進学したい	1	2	7	10	20	3.1%		
2	条件があれば大学院へ進学したい	18	6	20	5	49	7.5%		
3	就職したい	221	29	123	130	503	77.3%		
4	未定	50	3	14	12	79	12.1%		
合計		290	40	164	157	651	—		
設問4.	（設問3に対して、1・2を選択した方のみ）本学の体育学研究科体育学専攻（修士・博士前期）への進学を希望しますか？								
		1年生	2年生	3年生	4年生以上	合計	全体%		
1	進学を希望する	0	1	3	6	10	1.5%		
2	条件があれば進学を希望する	4	0	7	1	12	1.8%		
3	進学先の1つとして検討する	13	6	13	2	34	5.2%		
4	進学を希望しない（他大学の大学院修士への進学を希望する）	1	0	2	6	9	1.4%		
5	未定	1	1	2	0	4	0.6%		
合計		19	8	27	15	69	—		
設問5.	（設問4に対して、1・2・3を選択した方のみ）体育学研究科体育学専攻（博士後期）が開設された場合、進学を希望しますか？								
		1年生	2年生	3年生	4年生以上	合計	全体%		
1	進学を希望する	0	0	3	1	4	0.6%		
2	条件があれば進学を希望する	4	2	7	0	13	2.0%		
3	進学先の1つとして検討する	13	4	10	7	34	5.2%		
4	進学を希望しない（他大学の大学院修士への進学を希望する）	0	1	1	1	3	0.5%		
5	未定	0	0	2	0	2	0.3%		
合計		17	7	23	9	56	—		

東海大学大学院体育学研究科体育学専攻（博士課程後期）の設置に関するアンケート調査 集計結果			
調査対象：東海大学大学院体育学研究科体育学専攻（修士課程）修了生 調査実施期間：2020年8月11日（金）～17日（月）			
調査依頼者数	53		
有効回答者数	49		
設問		件数	全体%
設問1.	あなたの修士課程修了年月を教えてください。		
	1995年～2020年3月修了生	—	—
設問2.	あなたの現在の職業を教えてください。		
	会社員、個人事業主、教員 等	—	—
設問3.	あなたが修士課程を修了したときに、本学の体育学研究科に博士課程後期があったと仮定した場合、あなたは、進学を希望しましたか？		
	東海大学大学院体育学研究科の博士課程への進学を希望した	22	44.9%
	希望しない（他大学大学院の博士課程への進学を希望する等）	14	28.6%
	わからない	13	26.5%
設問4.	あなたは、設置構想中の体育学研究科体育学専攻（博士課程後期）が開設された場合、今後、進学を希望しますか？		
	進学を希望する	5	10.2%
	現在の就職先の許可や学費等の条件があえば進学を希望する	19	38.8%
	希望しない（他大学院博士課程を希望する等）	18	36.7%
	わからない	7	14.3%
設問5.	【設問3または4で、「進学を希望した」または「進学を希望する」場合】 進学を希望する、または検討している、と考える動機は何ですか？（複数選択可）		
	博士の学位を取得するため	21	42.9%
	研究職に就きたいため	9	18.4%
	設置の理念や養成する人材像に記載された力を身に付け、社会で活躍するため	17	34.7%
	その他（新たな知見の獲得と将来の選択肢を広げるため 等）	3	6.1%

(新旧対照表) 学生確保の見通し等を記載した書類 1～3 ページ

新	旧
<p>(1) 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況</p> <p>① 学生の確保の見通し</p> <p>ア 定員充足の見込み</p> <p><略></p> <p>また、我が国の体育・スポーツ系大学院博士後期課程の志願・入学者数について、<u>過去3年度調査したところ、本学博士課程後期が所在する関東圏の大学については、概ね定員を充足し、一部の大学では、定員を大きく上回る多数の大学院生を受け入れている状況であることから、関東圏の大学院の体育・スポーツ系博士後期課程への進学需要は高い傾向にあると考えられる。</u></p> <p><u>さらに定員充足の見込みの確認するため、2020年度修士課程1年生と学部、修士課程修了生(すでに社会人となっている者)に対して進学意向のアンケート調査を実施した。</u></p> <p>■2020年度修士課程1年生への進学意向のアンケート調査</p> <p><u>2020年5月、博士課程後期の基礎となる体育学研究科体育学専攻修士課程1年生に対して進学意向のアンケート調査を実施した。</u></p> <p><u>その結果、本学大学院博士課程後期への「進学を希望する」と回答した学生は3名であり、設定する入学定員に達した。</u></p> <p>■学部生への進学意向のアンケート調査</p> <p><u>2020年5月、体育学部の1～4年生(修業年限超過者含む)に対して進学意向のアンケート調査を実施した。</u></p> <p><u>まずは修士課程への進学希望を問う設問に対し、「進学を希望する」と回答したのは次のとおりであった。</u></p> <p><u>4年生以上(修業年限超過者含む)は6名、3年生は3名、2年生は1名、1年生は0名。</u></p> <p><u>学年が上がるほど進学希望者が多くなっており、これは高学年になるほどゼミナールや卒業研究を通じ自身の研究活動の進捗や取り組</u></p>	<p>(1) 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況</p> <p>① 学生の確保の見通し</p> <p>ア 定員充足の見込み</p> <p><略></p> <p>また、我が国の体育・スポーツ系大学院博士後期課程の志願・入学者数について、<u>過去3年度調査したところ、概ね定員を充足し、一部の大学では、定員を大きく上回る多数の大学院生を受け入れている状況であることから、全国の大学院の体育・スポーツ系博士後期課程への進学需要は十分にあると考えられる。</u></p>

む意欲が高まっているため、学部で行った研究を修士課程においても継続したいと考える学生が増えるためと考えられる。2020年度は本学においても新学期開始がゴールデンウィーク明けであった。4年生以上においては新学年開始直後の段階で明確に修士課程への進学希望を示した学生が6名おり、今後卒業研究等が進むにつれ、研究活動への意欲の高まりから、進学希望者が増えることが見込まれる。

続いて博士課程後期への進学希望を問う設問に対し、4年生以上では「進学を希望する」と回答したのは1名であった。しかし、前述のとおり修士課程に進学後、さらに研究活動を継続させていくことで博士課程後期への進学意欲が向上することが見込まれる。後述する「進学説明会」において博士課程後期における研究活動のイメージを明確し、説明内容を充実化させることで、特に「進学先の1つとして検討する」と回答した7名（4年生以上）を中心により進学希望者を拡充させることは可能であると考えられる。

また、3年生は現時点で博士課程後期へ「進学を希望する」の回答者が3名おり、上述のような取り組みでさらに段階的な進学希望者の拡充を達成することができると考える。

■ 修了生への進学意向のアンケート調査

2020年8月、修了生（修士課程を修了し、すでに社会人となっている者）53名に対して進学意向のアンケート調査を実施した。

結果、「あなたは、設置構想中の体育学研究科体育学専攻（博士課程後期）が開設された場合、今後、進学を希望しますか？」の設問に、「進学を希望する」と回答した者が5名に達した。

これまでの進学意向アンケート調査の結果をまとめれば、次の通りとなる。

〈2019年12月実施〉修士課程1年生（現在修士課程2年生）【博士課程後期開設年度進学対象】への調査では、「進学を希望する」5名。

〈2020年5月実施〉修士課程1年生【博士課程

<p><u>後期開設 2 年度進学対象】への調査では、「進学を希望する」3名。</u></p> <p><u>〈2020 年 5 月実施〉学部 4 年生以上【博士課程後期開設完成年度進学対象】への調査では、「進学を希望する」1名、「条件が合えば進学を希望する」0名、「進学先の1つとして検討する」7名。</u></p> <p><u>〈2020 年 5 月実施〉学部 3 年生【博士課程後期開設 4 年度進学対象】への調査では、「進学を希望する」3名、「条件が合えば進学を希望する」7名、「進学先の1つとして検討する」10名。</u></p> <p><u>以上の結果に、修了生（社会人）の「進学を希望する」5名を加えれば、博士課程後期が設定する入学定員3名は、中長期的に、継続的に確保できることが見込まれる。</u></p>	
--	--

(新旧対照表) 学生確保の見通し等を記載した書類 3~4 ページ

新	旧
<p>イ 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要 <略></p> <p>3) 我が国の体育・スポーツ系大学院博士後期課程の志願・入学者数 (資料3)</p> <p>本学博士課程後期と類似する、体育・スポーツ系大学院研究科博士後期課程の入試状況について、国公立大学を含めて調査した。</p> <p>志願者数を公表していない大学があるが、<u>本学博士課程後期が所在する関東圏において、一部の大学では、定員を大きく上回る多数の大学院生を受け入れている状況であり、関東圏の大学院における体育・スポーツ系博士後期課程の進学需要は高い傾向にあると考えられる。</u></p> <p>4) 東海大学大学院体育学研究科体育学専攻博</p>	<p>イ 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要 <略></p> <p>3) 我が国の体育・スポーツ系大学院博士後期課程の志願・入学者数 (資料3)</p> <p>本学博士課程後期と類似する、体育・スポーツ系大学院研究科博士後期課程の入試状況について、国公立大学を含めて調査した。</p> <p>志願者数を公表していない大学があるが、<u>一部の大学では、定員を大きく上回る多数の大学院生を受け入れている状況であり、全国の大学院における体育・スポーツ系博士後期課程の進学需要は十分にあると考えられる。</u></p> <p>4) 「既設大学等の状況」定員超過率 0.7 倍未満の学科等の過去 5 年間の入試状況」(資料4)</p> <p><u>2015 年度入試~2019 年度入試における、「既設大学等の状況」定員超過率 0.7 倍未満の学科の志願者数、受験者数、合格者数、入学者数、入学定員超過率の項目を記載した。</u></p>

<p><u>士課程後期に関するアンケート調査(2020年度修士課程1年生対象)(資料4)</u></p> <p>2020年5月、修士課程1年生に博士課程後期への進学に関するアンケート調査を実施した。調査では、本学博士課程後期への進学の可能性を明確に探った。その結果、修士課程1年生において、本学博士課程後期への進学を希望している学生数は3名であり、入学定員に達していることが判明した。</p> <p>5) <u>東海大学大学院体育学研究科体育学専攻博士課程後期に関するアンケート調査(2020年度体育学部生対象)(資料5)</u></p> <p>2020年5月、体育学部1~4年生(修業年限超過者含む)に対して、博士課程後期への進学に関するアンケート調査を実施した。調査では、本学博士課程後期への進学の可能性を明確に探った。その結果、学部3~4年生以上において、本学博士課程後期への進学を希望している・進学先の1つとして検討している学生数及びほぼ入学定員に達していることが判明した。</p> <p>6) <u>東海大学大学院体育学研究科体育学専攻博士課程後期に関するアンケート調査(修士課程修了生対象)(資料6)</u></p> <p>2020年8月、修了生(社会人となっている者)に対して、博士課程後期設置後の進学意向を確認すべく博士課程後期への進学に関するアンケート調査を実施した。調査では、本学博士課程後期への進学の可能性を明確に探った。その結果、本学博士課程後期への進学を希望している者が5名に達していることが判明した。</p>	
--	--

(新旧対照表) 学生確保の見通し等を記載した書類 5 ページ

新	旧
<p>② 学生確保に向けた具体的な取組状況 新設する博士課程後期の取組状況</p> <p>「設置の趣旨等を記載した書類」で述べた研究情報交換会は、博士課程後期の大学院生だけでなく修士課程(博士課程前期)の大学院生も参加して、大学院研究指導教員と大学院学生の</p>	<p>② 学生確保に向けた具体的な取組状況 新設する博士課程後期の取組状況</p> <p>「設置の趣旨等を記載した書類」で述べた研究情報交換会は、博士課程後期の大学院生だけでなく修士課程(博士課程前期)の大学院生も参加して、大学院研究指導教員と大学院学生の</p>

活発な議論が展開されるが、この中で、博士課程前期と博士課程後期との連続を意識させ、これを博士課程後期への進学の契機としていく。

また、修士課程の大学院生に対して、毎年度4月初め及び10月初めにガイダンスを行うが、この機会を捉えて、博士課程後期の教育研究目的、教育課程等の説明、アナウンスを行い、博士課程後期への進学につなげる。

以上の機会に加えて「進学説明会」の充実を行う。現在、例年10月に、学部生を対象として、体育学研究科修士課程への「進学説明会」を開催している。この「進学説明会」は、体育学研究科修士課程の概要説明、研究指導教員の紹介に加え、修士課程の在學生や修了生との意見交換等を含んだ進学相談会としている。この説明会の目的は、学部生が持つ希望や計画と、実際の修士課程の研究内容・進路等を学生単位で個別にマッチングすることであり、教員・在學生・修了生と直接話ができる環境を整えて行われるものである。これを博士課程後期への進学も含めた内容に充実することで、学部生に対して博士課程後期までの進学意欲を喚起し、進学につなげる。

活発な議論が展開されるが、この中で、博士課程前期と博士課程後期との連続を意識させ、これを博士課程後期への進学の契機としていく。

また、修士課程の大学院生に対して、毎年度4月初め及び10月初めにガイダンスを行うが、この機会を捉えて、博士課程後期の教育研究目的、教育課程等の説明、アナウンスを行い、博士課程後期への進学につなげる。

(是正事項) 体育学研究科 体育学専攻 (D)

5. <既設課程との関係が不明確>

本課程は、既設の修士課程を基礎として設置し、既存の領域の研究内容や高度解析技術を発展させるものとしているが、授業概要やシラバスに記載された具体的な授業の内容では、修士課程の指導からどのように高度化しているか不明確である。既設の修士課程のカリキュラム内容等と比較し、どのように専門性が高まっているのか、他領域との融合をどのように担保しているのか、より詳細に説明すること。

(対応)

審査意見「授業概要やシラバスに記載された具体的な授業の内容では、修士課程の指導からどのように高度化しているか不明確である。既設の修士課程のカリキュラム内容等と比較し、どのように専門性が高まっているのか」との指摘に対して、修士課程のカリキュラムとの関連性を踏まえながら説明する。

修士課程と博士課程後期のカリキュラムの関連性と高度化を明確にするために、「現行修士課程と博士課程後期の関連図」を作成した。関連図の「1. カリキュラムの関連性」において次の通り説明する。

修士課程のカリキュラムにおいては、

- ①共通科目で学ぶ「幅広く物事をとらえる視点、研究に必要な力」
- ②「スポーツ文化社会科学領域」「スポーツ医科学領域」「実践スポーツ科学領域」の3つの科目区分から深化させた専門性
- ③ゼミナール科目「体育学研究」を通じて身につけた自ら課題に取り組み、修士論文を作成した成し遂げる力

カリキュラムを通じて修得した①②③に加えて、博士課程においてデータサイエンス及びデータマネジメントをベースとして、高度な体育・スポーツ科学の研究能力を社会に還元できるように、より高度化していく。

博士課程のカリキュラムにおいては、

- ④共通科目において、自らの研究を社会に還元してするために必要な技術（データサイエンス及びデータマネジメント）と倫理観・使命感を身に付けるとともに、「博士論文の作成と成果の社会への還元を目指し、専門性を高めていく」ことに加え、「本研究科を構成する3領域のみならず、社会を構成する各分野へ広がる視点の育成を図っていく」ために必要な基礎的な力を養う。
- ⑤専門科目において、専門性のみならず、本研究科の3領域に加え他分野との交流を通じて幅広い知識と考え方の融合を図る。
- ⑥特別研究において、正しい倫理観・独創性・創造性の獲得をもって博士論文の作成とその成果を社会に還元していく。

以上、①～⑥の関連性により、修士課程から博士課程後期へ連動できるような教育課程となっている。

この連動を踏まえ、関係図の「2. 修士課程からの専門性の高まり」において、修士課程からの高度化を次の通り説明する。

博士課程の専門科目である、「高度スポーツ文化社会科学特講」「高度スポーツ文化社会科学演習」「高度スポーツ医科学特講」「高度スポーツ医科学演習」「高度実践スポーツ科学

特講「高度実践スポーツ科学演習」は、修士課程における専門科目で学んだ各領域（スポーツ文化社会科学領域・スポーツ医科学領域・実践スポーツ科学領域）の多数の科目を包括的に捉えて統合し、さらに高度化させると共に、研究成果を社会へ還元するための応用能力の獲得を目的として設置している。

そして、各科目において、次の通り、修士課程から高度化する内容となっている。

「高度スポーツ文化社会科学特講」では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における人文社会科学的アプローチ（体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学）によって問題把握の多角化をはかるとともに、それを包括的に捉えて統合し、これを通して研究を独創的に遂行する能力を育成する。なお、本科目においては、体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学における最前線の議論や知見に触れ、修士課程で獲得された一般的研究能力における人文社会科学的認識・思考能力の洗練を通じて、学識と思考力を拡充し、研究者としての高度な創造性を養う。

「高度スポーツ文化社会科学演習」では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における人文社会科学的アプローチによって問題解決能力の拡充をはかるとともに、これを通して研究を独創的に遂行する能力を高める。本科目においては、修士課程で獲得された一般的研究能力における人文社会科学的認識・思考能力のさらなる洗練のために、最前線の議論や知見を踏まえながら、広大で歴史的な知の総体において自らの問題追求を相対化することで、研究者としての学識や良識の錬磨と高度な研究スキルを身に付ける。

「高度スポーツ医科学特講」では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）を学び、博士課程後期の研究として、研究課題の焦点化に資する専門知識を身につける。同時に、当該学問分野における最前線の解析方法や研究事例に触れ、研究を独創的かつ創造的に遂行する能力を育成する。

「高度スポーツ医科学演習」では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチによるスポーツ科学実験研究のプロセス（計画→測定→処理→論議）を演習として学ぶ。これらを通じて、当該分野において、質の高い研究テーマ、研究デザイン、修士課程で学修した内容を基礎に、博士課程としてふさわしい研究者としての学識や良識の錬磨と、論文執筆を遂行できる高度な研究スキルを身に付ける。

「高度実践スポーツ科学特講」では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会・国民に果たす具体的な意義について、修士課程より研究範囲を広げ国内外の様々な先端研究のエビデンスから考究する。特に、ウエルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツをキーワードとして、それぞれの分野の最新の研究動向やビジネスへの応用について、修士課程より深めた解説から、現代社会・国民と地域の発展に役立つ研究を遂行できる能力とマネジメント力を駆使した創造性を育成する。

「高度実践スポーツ科学演習」では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会において貢献しうる研究テーマや研究デザインを、具体的に考案する能力を養う。特に、それぞれの分野において、質の高い研究テーマや実現可能な研究デザインを立案し、ビジネスに

用するための最新情報を取り扱う。加えて、対象領域の広い実践スポーツ科学分野の専門家となるため、修士課程で学修した内容を基礎に、博士課程としてふさわしい学識や良識の錬磨を図り、自立した研究者になるための高度な研究スキルを身に付ける。

以上の内容に加え、各領域の演習科目において、他分野との交流を通じた幅広い知識と考え方の融合を図ることで、修士課程より高度化したカリキュラムとなっている。この点については、審査意見「他領域との融合をどのように担保しているのか」の指摘への対応において具体的に説明する。

審査意見の「他領域との融合をどのように担保しているのか」との指摘については、教育課程において、次の通り、教育課程において担保されている。

「スポーツ科学研究理論」においては、全教員が担当することで、他領域の最新情報を踏まえたうえで、体育・スポーツ科学の学際性と領域の広がりを理解する。このことによって研究領域の多様性を認識して広い視野を持ち、体育・スポーツ科学に求められる社会課題を考察できる応用的な力を身につける。さらに、3領域を跨る視点の必要性に加え、さらに複雑化する現代における体育・スポーツ科学分野だけではない幅広い視点と他分野との融合の必要性についても講義を行う。

「高度スポーツ文化社会科学特講」「高度スポーツ医科学特講」「高度実践スポーツ科学特講」においては、研究テーマの確定に向けた意見交換等を行うとともに、3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含め解説する。そして、修士課程から身に付けてきた、本領域における専門的な知見と幅広い視点、そして他分野との融合を含め、自らの研究テーマとの関連性について再検証を行い、レポートの作成、ディスカッションを行う。

「高度スポーツ文化社会科学演習」においては、隣接する分野（社会学・歴史学等）の専門家・学生と協同しパネルディスカッションにより意見交換を行う。これにより、論文の作成能力や発表力の向上を目指すだけではなく、自分の研究テーマについて広い視点で俯瞰的に見直しを行い、より独創性と創造性の高い研究の実現を目指していく。

「高度スポーツ医科学演習」においては、医学、工学、理学等の他の分野と融合したプロジェクト研究に参加し、計画・測定・処理・論議の全体を経験・発表し、研究能力・成果を社会に還元する力を身につけ、プロジェクト研究に参加した結果について、自分の研究テーマと関連した「現状との差異や問題点」などについて発表・意見交換も行き、より広い視点をもった俯瞰的な見直しを行い、より独創性と創造性の高い研究の実現につなげていくことを目指す。

「高度実践スポーツ科学演習」においては、実践スポーツ科学の担当教員が進めているプロジェクト研究や活動の内容を理解するとともに実際に参加し、プロジェクト研究という実践の場を通じ、自らの研究テーマについての方針・取り組み方などについて再確認をおこなうことに加えて、より高度な専門性、より広い視点の必要性について再確認を行う。

なお、プロジェクト研究については、スポーツ技術向上と健康・体力増進を目的として取り組んでいる本学の総合大学の利点を活かした共同研究をさす。

本研究科博士課程後期の専任教員が学内の他の研究科・学部等と連携し、具体的な例を

挙げれば、医学部と連携した「側彎症プロジェクト（側彎症の手術前後・リハビリ後の運動評価）」、大学院工学研究科・工学部と連携した「義足開発プロジェクト（関節の特性を加味した無動力大腿義足の開発と適合性評価）」、大学院総合理工学研究科・理学部と連携した「スポーツビッグデータプロジェクト（ビッグデータを用いたスポーツ支援システムの開発）」等を実施しており、学術的にも、実践的にも多くの研究成果を上げており、本研究科における研究活動の特色となっている。

現在、このプロジェクト研究により、最先端の研究において、本研究科の学問分野である体育・スポーツ科学と他の分野（医学・工学・理学等）との融合が行われている状況であり、その研究成果を本研究科博士課程後期の教育課程において、演習科目におけるプロジェクト研究への理解・参加という形でフィードバックすることにより、体育・スポーツ科学以外の他分野と研究・教育で融合できる力を養成する。

また、博士課程後期の設置によって体育・スポーツ科学研究の博士課程レベルの研究環境が整えば、プロジェクト研究の活動はさらに活発となり、研究成果のフィードバックがさらに促進され、大学院生の研究成果の博士論文へ反映、社会への還元が可能になる。

このように、研究活動の成果を教育活動に反映していく教育活動のサイクルを、体育学部学士課程→体育学研究科修士課程（博士課程前期）→博士課程後期の教育活動の連動の中で広げていくことにより、研究活動においても、体育・スポーツ科学の枠を超えた他領域との融合研究を、さらに活発に実施していくことが可能になると確信している。

以上の対応に基づき、「設置の趣旨等を記載した書類」を修正・追記し、「現行修士課程と博士課程後期の関連図」を資料10として追加する。また、これに伴い、該当科目の「授業科目の概要」「シラバス」を修正する。

現行修士課程と博士課程後期の関連図

1. カリキュラムの関連性

修士課程において養ってきた力、①共通科目における「幅広く物事をとらえる視点、研究に必要な力」、②「スポーツ文化社会科学領域」「スポーツ医科学領域」「実践スポーツ科学領域」の3つの科目区分から深化させた専門性、③ゼミナール科目「体育学研究」を通じて身に着けた自ら課題に取り組み、修士論文を作成した成し遂げる力に、博士課程においてデータサイエンス及びデータマネジメントをベースとして、高度な体育・スポーツ科学の研究能力を社会に還元できるように、より高度化していく。

具体的に博士課程においては、④共通科目において、自らの研究を社会に還元してするために必要な技術（データサイエンス及びデータマネジメント）と倫理観・使命感を身に付けるとともに、「博士論文の作成と成果の社会への還元を目指し、専門性を高めていく」ことに加え、「本研究科を構成する3領域のみならず、社会を構成する各分野へ広がる視点の育成を図っていく」ために必要な基礎的な力を養う。⑤専門科目において、専門性のみならず、本研究科の3領域に加え他分野との交流を通じて幅広い知識と考え方の融合を図り、⑥特別研究において、正しい倫理観・獨創性・創造性の獲得をもって博士論文の作成とその成果を社会に還元していくことにより、修士課程（博士課程前期）から博士課程後期に連動できるよう、教育課程を構築していく。

(体育学研究科体育学専攻 修士課程)					(体育学研究科体育学専攻 博士課程後期)				
	授業科目の名称	配当年次	必修	単位	科目区分	授業科目の名称	配当年次	必修	単位
③ ナ ー リ ン グ ゼ ミ	体育学研究 1	1前	必修	2	⑥特別研究	体育・スポーツ科学特別研究 1	2前	必修	2
	体育学研究 2	1後	必修	2		体育・スポーツ科学特別研究 2	2後	必修	2
	体育学研究 3	2前	必修	2		体育・スポーツ科学特別研究 3	3前	必修	2
	体育学研究 4	2後	必修	2		体育・スポーツ科学特別研究 4	3後	必修	2
					【説明】				
					⑥特別研究において、修士課程（博士課程前期）から博士課程後期に連動できるよう、教育課程を構築していく。修士課程から身に付けてきた考え方や力（①～⑤）を結び付け、博士論文の作成につなげていく。そして、正しい倫理観・獨創性・創造性の獲得をもって博士論文の作成を行い、その成果を社会に還元していく。				
科目区分	授業科目の名称	配当年次	必修	単位	科目区分	授業科目の名称	配当年次	必修	単位
②スポーツ文化社会科学領域	10科目	各2単位	選択科目		⑤専門	高度スポーツ文化社会科学演習	1後	選択	2
						高度スポーツ文化社会科学特講	1前	選択	2
②スポーツ医科学領域	8科目	各2単位	選択科目		⑤専門	高度スポーツ医科学演習	1後	選択	2
						高度スポーツ医科学特講	1前	選択	2
②実践スポーツ科学領域	20科目	各2単位	選択科目		⑤専門	高度実践スポーツ科学演習	1後	選択	2
						高度実践スポーツ科学特講	1前	選択	2
					【説明】				
					⑤専門科目においては、修士課程で身に付けた専門性の高度化だけではなく、本研究科の3領域に加え他分野との交流を通じて幅広い知識と考え方の融合を図り、プロジェクト研究、パネルディスカッション等を通じて実践力・応用力等、研究能力・研究成果を社会へ還元する能力を獲得し、獨創的・創造性に優れた高度な研究能力を育成していく。				
	授業科目の名称	配当年次	必修	単位	科目区分	授業科目の名称	配当年次	必修	単位
① 共 通	体育学研究総論	1前	必修	2	④共通	スポーツ科学研究理論	1前	必修	2
	体育学研究法A	1前	必修	2		スポーツ科学研究法A	1後	選択	2
	体育学研究法B	1後	必修	2		スポーツ科学研究法B	1後	選択	2
	体育学文献講読	1後	選択	2		【説明】			
	体育学特論A	1前・2後	選択	2	修士課程のカリキュラムの構成と対応するように、博士課程においても、④共通科目群、⑤専門科目群、⑥特別研究科目群を設定している。				
	体育学特論B	1後・2後	選択	2	博士課程においては、まずは④共通科目において、自らの研究を社会に還元してするために必要な技術（データサイエンス及びデータマネジメント）と倫理観・使命感を身に付け、「博士論文の作成と成果の社会への還元を目指し、専門性を高めていく」ことに加え、「本研究科を構成する3領域のみならず、社会を構成する各分野へ広がる視点の育成を図っていく」ために必要な基礎的な力を養う。				
	体育学特論C	1前・2前	選択	2					
	体育学特論D	1後・2後	選択	2					
小計（8科目）		-							

2. 修士課程からの専門性の高まり

(体育学研究科体育学専攻 修士課程)					(体育学研究科体育学専攻 博士課程後期)				
	授業科目の名称	配当年次	必選	単位	科目区分	授業科目の名称	配当年次	必選	単位
スポーツ文化社会科学領域	体育哲学特論	1前・2前	選択	2	専門	高度スポーツ文化社会科学演習	1後	選択	2
	体育哲学演習	1後・2後	選択	2	専門	高度スポーツ文化社会科学特講	1前	選択	2
	スポーツ社会学特論	1前・2前	選択	2	【説明】 博士課程の専門科目は、修士課程における専門科目で学んだ各領域の多数の科目を包括的に捉えて統合し、さらに高度化させると共に、研究成果を社会へ還元するための応用能力の獲得を目的として設置している。 高度スポーツ文化社会科学特講では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における人文社会科学的アプローチ（体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学）によって問題把握の多角化をはかるとともに、それを包括的に捉えて統合し、これを通して研究を独創的に遂行する能力を育成する。なお、本科目においては、体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学における最前線の議論や知見に触れ、修士課程で獲得された一般的研究能力における人文社会科学的認識・思考能力の洗練を通じて、学識と思考力を拡充し、研究者としての高度な創造性を養う。 高度スポーツ文化社会科学演習では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における人文社会科学的アプローチによって問題解決能力の拡充をはかるとともに、これを通して研究を独創的に遂行する能力を高める。本科目においては、修士課程で獲得された一般的研究能力における人文社会科学的認識・思考能力のさらなる洗練のために、最前線の議論や知見を踏まえながら、広大で歴史的な知の総体において自らの問題追求を相対化することで、研究者としての学識や良識の錬磨と高度な研究スキルを身に付ける。 また、同時に学生の研究テーマに合わせて、本研究科を構成する他領域との連携や、体育学分野にかかわらず、教育研究における他の分野との融合を演習を通じて推進していく。				
	スポーツ社会学演習	1後・2後	選択	2					
	スポーツ史特論	1前・2前	選択	2					
	スポーツ史演習	1後・2後	選択	2					
	スポーツ心理学特論	1前・2前	選択	2					
	スポーツ心理学特別実習	1後・2後	選択	2					
	応用スポーツ心理学特論	1前・2前	選択	2					
	応用スポーツ心理学特別実習	1後・2後	選択	2					
小計（10科目）	-								
スポーツ医科学領域	運動生理学特論	1前・2前	選択	2		専門	高度スポーツ医科学演習	1後	選択
	運動生理学特別実習	1後・2後	選択	2	専門	高度スポーツ医科学特講	1前	選択	2
	スポーツバイオメカニクス特論	1後・2後	選択	2	【説明】 博士課程の専門科目は、修士課程における専門科目で学んだ各領域の多数の科目を包括的に捉えて統合し、さらに高度化させると共に、研究成果を社会へ還元するための応用能力の獲得を目的として設置している。 高度スポーツ医科学特講では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）を学び、博士課程後期の研究として、研究課題の焦点化に資する専門知識を身につける。同時に、当該学問分野における最前線の解析方法や研究事例に触れ、研究を独創的かつ創造的に遂行する能力を育成する。 高度スポーツ医科学演習では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチによるスポーツ科学実験研究のプロセス（計画→測定→処理→論議）を演習として学ぶ。これらを通じて、当該分野において、質の高い研究テーマ、研究デザイン、修士課程で学修した内容を基礎に、博士課程後期としてふさわしい研究者としての学識や良識の錬磨と、論文執筆を遂行できる高度な研究スキルを身に付ける。さらに、後半の共同の部分で、医学、工学、理学等の他分野が融合したプロジェクト研究に参加し、研究能力・成果を社会に還元する力を身につける。 また、同時に学生の研究テーマに合わせて、本研究科を構成する他領域との連携や、体育学分野にかかわらず、教育研究における他の分野との融合を演習を通じて推進していく。				
	スポーツバイオメカニクス特別実習	1前・2前	選択	2					
	スポーツ医学特論	1前・2前	選択	2					
	スポーツ医学特別実習	1後・2後	選択	2					
	体力学特論	1後・2後	選択	2					
	体力学特別実習	1前・2前	選択	2					
小計（8科目）	-								
実践スポーツ科学領域	武道学特論	1後・2後	選択	2		専門	高度実践スポーツ科学演習	1後	選択
	武道学特別実習	1前・2前	選択	2	専門	高度実践スポーツ科学特講	1前	選択	2
	スポーツ方法学特論	1前・2前	選択	2	【説明】 博士課程の専門科目は、修士課程における専門科目で学んだ各領域の多数の科目を包括的に捉えて統合し、さらに高度化させると共に、研究成果を社会へ還元するための応用能力の獲得を目的として設置している。 高度実践スポーツ科学特講では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会・国民に果たす具体的な意義について、修士課程より研究範囲を広げ国内外の様々な先端研究のエビデンスから考究する。特に、ウェルネス、スポーツ・レジャー・マネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツをキーワードとして、それぞれの分野の最新の研究動向やビジネスへの応用について、修士課程より深めた解説から、現代社会・国民と地域の発展に役立つ研究を遂行できる能力とマネジメント力を駆使した創造性を育成する。 高度実践スポーツ科学演習では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会において貢献しうる研究テーマや研究デザインを、具体的に考察する能力を養う。特に、それぞれの分野において、質の高い研究テーマや実現可能な研究デザインを立案し、ビジネスに応用するための最新情報を取り扱う。加えて、対象領域の広い実践スポーツ科学分野の専門家となるため、修士課程で学修した内容を基礎に、博士課程後期としてふさわしい学識や良識の錬磨を図り、自立した研究者になるための高度な研究スキルを身に付ける。また、実践スポーツ科学の担当教員が進めている研究プロジェクトや活動の内容を理解するとともに参加して、中核的に研究に携わることで、博士論文のテーマについての研究を深めていく。 また、同時に学生の研究テーマに合わせて、本研究科を構成する他領域との連携や、体育学分野にかかわらず、教育研究における他の分野との融合を演習を通じて推進していく。				
	スポーツ方法学特別実習	1後・2後	選択	2					
	生涯スポーツ特論	1前・2前	選択	2					
	生涯スポーツ演習	1後・2後	選択	2					
	スポーツ&レジャー特論	1前・2前	選択	2					
	スポーツ&レジャー演習	1後・2後	選択	2					
	スポーツマネジメント特論	1前・2前	選択	2					
	スポーツマネジメント演習	1後・2後	選択	2					
	健康教育学特論	1前・2前	選択	2					
	健康教育学演習	1後・2後	選択	2					
	スポーツ運動学特論	1前・2前	選択	2					
	スポーツ運動学演習	1後・2後	選択	2					
	コーチング特論	1前・2前	選択	2					
	コーチング特別実習	1後・2後	選択	2					
	トレーニング特論	1後・2後	選択	2					
	トレーニング特別実習	1前・2前	選択	2					
	保健体育科教育学特論	1前・2前	選択	2					
	保健体育科教育学演習	1後・2後	選択	2					
小計（20科目）	-								

新	旧
<p>2) 既設の修士課程との関係</p> <p>【修士課程との関連】</p> <p><略></p> <p>以上の内容に加え、既設の体育学研究科修士課程と博士課程後期の連動性を明確にし、修士課程からの高度化を示すため、次の項目において説明する。</p> <p>【修士課程との関連とその高度化】</p> <p>修士課程と博士課程後期のカリキュラムの関連性と高度化を明確にするために、関連図(資料10:「現行修士課程と博士課程後期の関連図」)を示し、次の通り説明する。</p> <p>修士課程のカリキュラムにおいては、</p> <p>①共通科目で学ぶ「幅広く物事をとらえる視点、研究に必要な力」</p> <p>②「スポーツ文化社会科学領域」「スポーツ医学領域」「実践スポーツ科学領域」の3つの科目区分から深化させた専門性</p> <p>③ゼミナール科目「体育学研究」を通じて身につけた自ら課題に取り組み、修士論文を作成した成し遂げる力</p> <p>に加えて、博士課程においてデータサイエンス及びデータマネジメントをベースとして、高度な体育・スポーツ科学の研究能力を社会に還元できるように、より高度化していく。</p> <p>博士課程のカリキュラムにおいては、</p> <p>④共通科目において、自らの研究を社会に還元してくために必要な技術(データサイエンス及びデータマネジメント)と倫理観・使命感を身に付けるとともに、「博士論文の作成と成果の社会への還元を目指し、専門性を高めていく」ことに加え、「本研究科を構成する3領域のみならず、社会を構成する各分野へ広がる視点の育成を図っていく」ために必要な基礎的な力を養う。</p> <p>⑤専門科目において、専門性のみならず、本研究科の3領域に加え他分野との交流を通じて幅広い知識と考え方の融合を図る。</p>	<p>2) 既設の修士課程との関係</p> <p>【修士課程との関連】</p> <p><略></p>

<p>⑥特別研究において、正しい倫理観・独創性・創造性の獲得をもって博士論文の作成とその成果を社会に還元していく。</p> <p>以上、①～⑥の関連性により、修士課程から博士課程後期へ連動し、高度化する教育課程となっている。</p>	
--	--

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 13～15 ページ

新	旧
<p>③ 教育課程の編成の考え方及び特色（教育研究の柱となる領域（分野）の説明も含む）</p> <p>2) 教育課程の編成の概要</p> <p><略></p> <p>(3) 特別研究</p> <p><略></p> <p>以上述べてきた教育課程の編成の概要に加え、<u>「他領域・他分野との研究・教育における融合を通じて幅広い知識・考え方を修得する」</u>ための、教育課程の構造等詳細について、次の項目により説明する。</p> <p>【教育課程における他領域・他分野との研究・教育における融合】</p> <p><u>教育課程において、次の内容により、他領域・他分野との研究・教育における融合を図り、幅広い知識・考え方を修得させる。</u></p> <p><u>「スポーツ科学研究理論」において、「本研究科を構成する3領域のみならず、社会を構成する各分野へ広がる視点の育成を図っていく」ために必要な基礎的な力を養う。</u></p> <p><u>「高度スポーツ文化社会科学特講」「高度スポーツ医科学特講」「高度実践スポーツ科学特講」「高度スポーツ文化社会科学演習」「高度スポーツ医科学演習」「高度実践スポーツ科学演習」において、本研究科の3領域に加え、体育・スポーツ科学以外の他の分野との交流を通じて幅広い知識と考え方の融合を図り、他の分野とのプロジェクト研究、パネルディスカッション等を通じて研究・教育における融合を推し進める。</u></p>	<p>③ 教育課程の編成の考え方及び特色（教育研究の柱となる領域（分野）の説明も含む）</p> <p>2) 教育課程の編成の概要</p> <p><略></p> <p>(3) 特別研究</p> <p><略></p>

具体的には、教育課程において、次の通り推し進める。

共通科目の「スポーツ科学研究理論」において、他領域の最新情報を踏まえたうえで、体育・スポーツ科学の学際性と領域の広がりを理解し、このことによって研究領域の多様性を認識して広い視野を持ち、体育・スポーツ科学に求められる社会課題を考察できる応用的な力を身につける。さらに、3領域を跨る視点の必要性に加え、さらに複雑化する現代における体育・スポーツ科学分野だけではない幅広い視点と他分野との融合の必要性についても講義を行う。

専門科目の「高度スポーツ文化社会科学特講」「高度スポーツ医科学特講」「高度実践スポーツ科学特講」においては、研究テーマの確定に向けた意見交換等を行うとともに、3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含め解説し、修士課程から身に付けてきた、本領域における専門的な知見と幅広い視点、そして他分野との融合を含め、自らの研究テーマとの関連性について再検証を行い、レポートの作成、ディスカッションを行う。

「高度スポーツ文化社会科学演習」においては、隣接する分野（社会学・歴史学等）の専門家・学生と協同しパネルディスカッションにより意見交換を行う。これにより、論文の作成能力や発表力の向上を目指すだけでなく、自分の研究テーマについて広い視点で俯瞰的に見直しを行い、より独創性と創造性の高い研究の実現を目指していく。

「高度スポーツ医科学演習」においては、医学、工学、理学等の他の分野と融合したプロジェクト研究に参加し、計画・測定・処理・論議の全体を経験・発表し、研究能力・成果を社会に還元する力を身につけ、プロジェクト研究に参加した結果について、自分の研究テーマと関連した「現状との差異や問題点」などについて発表・意見交換もを行い、より広い視点をもった俯

徹的な見直しを行い、より独創性と創造性の高い研究の実現につなげていくことを目指す。

「高度実践スポーツ科学演習」においては、実践スポーツ科学の担当教員が進めているプロジェクト研究や活動の内容を理解するとともに実際に参加し、プロジェクト研究という実践の場を通じ、自らの研究テーマについての方針・取り組み方などについて再確認をおこなうことに加えて、より高度な専門性、より広い視点の必要性について再確認を行う。

なお、プロジェクト研究は、スポーツ技術向上と健康・体力増進を目的として取り組んでいる本学の総合大学の利点を活かした共同研究をさす。

本研究科博士課程後期の専任教員が学内の他の研究科・学部等と連携し、具体的な例を挙げれば、医学部と連携した「側彎症プロジェクト（側彎症の手術前後・リハビリ後の運動評価）」、大学院工学研究科・工学部と連携した「義足開発プロジェクト（関節の特性を加味した無動力大腿義足の開発と適合性評価）」、大学院総合理工学研究科・理学部と連携した「スポーツビッグデータプロジェクト（ビッグデータを用いたスポーツ支援システムの開発）」等を実施しており、学術的にも、実践的にも多くの研究成果を上げており、本研究科における研究活動の特色となっている。

現在、このプロジェクト研究により、最先端の研究において、本研究科の学問分野である体育・スポーツ科学と他の分野（医学・工学・理学等）との融合が行われている状況であり、その研究成果を本研究科博士課程後期の教育課程において、演習科目におけるプロジェクト研究への理解・参加という形でフィードバックすることにより、体育・スポーツ科学以外の他分野と研究・教育で融合できる力を養成する。

また、博士課程後期の設置によって体育・スポーツ科学研究の博士課程レベルの研究環境を整えば、プロジェクト研究の活動はさらに活発となり、研究成果のフィードバックがさらに促

<p><u>進され、大学院生の研究成果の博士論文へ反映、社会への還元が可能になる。</u></p> <p><u>このように、研究活動の成果を教育活動に反映していく教育活動のサイクルを、体育学部学士課程→体育学研究科修士課程（博士課程前期）→博士課程後期の教育活動の連動の中で広げていくことにより、研究活動においても、体育・スポーツ科学の枠を超えた他領域との融合研究を、さらに活発に実施していくことが可能になると確信している。</u></p>	
--	--

(新旧対照表) 授業科目の概要「スポーツ科学研究理論」

新	旧
<p>(概要)</p> <p>博士課程後期においては、コースワークとして、スポーツ文化社会科学・スポーツ医科学・実践スポーツ科学の3領域において専門科目を開設し、その科目の担当者がそれぞれリサーチワークである特別研究科目を開設している。</p> <p>スポーツ科学研究理論では、特別研究科目の担当者が、それぞれの分野の<u>最新の</u>研究方法論・研究成果の概説を行うことにより、リサーチワークへの導入と研究方法論の理解を促す。また、エビデンスに基づく研究成果、知見、技術などを社会へ還元することを目的に、データマネジメント、データサイエンスの概要についても学ぶ。<u>さらに、全教員が担当することで、他領域の最新情報を踏まえうえて、体育・スポーツ科学の学際性と領域の広がり</u>を理解する。<u>このことによって研究領域の多様性を認識して広い視野を持ち、体育・スポーツ科学に求められる社会課題を考察できる応用的な力を身につける。</u>博士課程後期で学修を進め、博士論文を作成していくにあたり、自らの研究の指針・考え方を確立していくための基幹となる科目である。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(◎ 萩 裕美子／2回)</p> <p>第1回授業では研究・教育に必要な正義感・倫理観の重要性について学ぶことに加え、コースワークとして設定する3領域を概説し、自らが取り組む研究課題の可能性や博士論文作成までのプロセス等について解説する。第2回授業ではスポーツ・レジャーの概念整理と国内外の最先端研究動向を踏まえ、社会におけるスポーツやレジャーの関わりや役割、デ</p>	<p>(概要)</p> <p>博士課程後期においては、コースワークとして、スポーツ文化社会科学・スポーツ医科学・実践スポーツ科学の3領域において専門科目を開設し、その科目の担当者がそれぞれリサーチワークである特別研究科目を開設している。</p> <p>スポーツ科学研究理論では、特別研究科目の担当者が、それぞれの分野の研究方法論・研究成果の概説を行うことにより、リサーチワークへの導入と研究方法論の理解を促す。また、エビデンスに基づく研究成果、知見、技術などを社会へ還元することを目的に、データマネジメント、データサイエンスの概要についても学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(9 萩 裕美子／2回)</p> <p>第1回授業では研究・教育に必要な正義感・倫理観の重要性について学ぶことに加え、コースワークとして設定する3領域を概説し、自らが取り組む研究課題の可能性や博士論文作成までのプロセス等について解説する。第2回授業ではスポーツ・レジャーの概念整理と国内外の最先端研究動向を踏まえ、社会におけるスポーツやレジャーの関わりや役割、デ</p>

<p>ータマネジメントの概要について、<u>3領域を跨る視点の必要性に加え、さらに複雑化する現代における体育・スポーツ科学分野だけではない幅広い視点と他分野との融合の必要性についても講義する。</u></p> <p><略></p> <p>(⑧ 久保田 晃生/1回)</p> <p>健康づくり・介護予防のための身体活動の意義、身体不活動の諸課題について、<u>修士論文より検索範囲を広めた国内外の運動疫学的研究における文献研究及び運動疫学的手法による実証的研究から明らかとすることについて、研究指導を行う。</u></p> <p><略></p>	<p>ータマネジメントの概要についても講義する。</p> <p><略></p> <p>(8 久保田 晃生/1回)</p> <p>健康づくり・介護予防のための身体活動の意義、身体不活動の諸課題について、<u>国内外の最新動向や先端研究の動向を踏まえて解説する。</u></p> <p><略></p>
---	--

(新旧対照表) 授業科目の概要「高度スポーツ文化社会科学特講」

新	旧
<p>(概要)</p> <p><u>専門区分科目は、修士課程における専門科目で学んだ各領域の多数の科目を包括的に捉えて統合し、さらに高度化させると共に、研究成果を社会へ還元するための応用能力の獲得を目的として設置している。これにより、高度スポーツ文化社会科学特講では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における人文社会科学的アプローチ（体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学）によって問題把握の多角化をはかるとともに、これを通して研究を独創的に遂行する能力を育成する。なお、本科目においては、体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学における最前線の議論や知見に触れ、<u>修士課程で獲得された一般的研究能力における人文社会科学的認識・思考能力の洗練を通じて、学識と思考力を拡充し、研究者としての高度な創造性を養う。</u></u></p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(① 阿部 悟郎・② 松浪 稔・③ 松本 秀夫/2回) (共同)</p> <p>第1回授業では、本科目で扱う研究領域である、最新の体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学などについて概説する。そして、第14回授業では、全体のまとめとして、研究テーマの確定に向けた意見交換等を行うとともに、<u>3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含め解説する。そして、修士課</u></p>	<p>(概要)</p> <p>高度スポーツ文化社会科学特講では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における人文社会科学的アプローチ（体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学）によって問題把握の多角化をはかるとともに、これを通して研究を独創的に遂行する能力を育成する。なお、本科目においては、体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学における最前線の議論や知見に触れ、学識と思考力を拡充し創造性を養う。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(1 阿部 悟郎・2 松浪 稔・3 松本 秀夫/2回) (共同)</p> <p>第1回授業では、本科目で扱う研究領域である、最新の体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学などについて概説する。そして、第14回授業では、全体のまとめとして、研究テーマの確定に向けた意見交換等を行う。</p>

<p>程から身に付けてきた、本領域における専門的な知見と幅広い視点、そして他分野との融合を含め、自らの研究テーマとの関連性について再検証を行い、レポートの作成、ディスカッションを行う。</p> <p>(① 阿部 悟郎／4回)</p> <p>第2～5回授業では、<u>修士課程の人文社会科学的領域の授業において得られた哲学・倫理学領域の認識に基づいて、純粋哲学領域に関する諸理論の相互連関を段階的に検討していく。</u>具体的には、<u>体育哲学における哲学的思考の有効性を踏まえたうえで、体育哲学の哲学的源泉、とくに観念論や実在論、自然主義、プラグマティズム、そして実存哲学に目を向けながら、体育本質論における人文主義的方向の可能性を模索していく。</u></p> <p><略></p> <p>(③ 松本 秀夫／4回)</p> <p>第10～13回授業では、<u>体育・健康・スポーツ（競技・生涯・障害）・レジャーを対象としたスポーツ心理学研究の歴史的背景と方向性、最新の配票・インターネットによる量的研究、フィールドワークによる質研究、生理的指標を用いた研究の動向と課題について、解析と方法論を含め解説する。</u></p>	<p>(1 阿部 悟郎／4回)</p> <p>第2～5回授業では、体育哲学における哲学的思考の有効性を踏まえたうえで、体育哲学の哲学的源泉、とくに観念論や実在論、自然主義、プラグマティズム、そして実存哲学に目を向けながら、体育本質論における人文主義的方向の可能性を模索していく。</p> <p><略></p> <p>(3 松本 秀夫／4回)</p> <p>第10～13回授業では、スポーツ心理学のアプローチによる、スポーツ・レジャーの関与と、情動、動機づけ、ライフスタイル変容、幸福感について最新の研究動向を取り上げながら解説する。</p>
---	--

(新旧対照表) 授業科目の概要「高度スポーツ医科学特講」

新	旧
<p>(概要)</p> <p><u>専門区分科目は、修士課程における専門科目で学んだ各領域の多数の科目を包括的に捉えて統合し、さらに高度化させると共に、研究成果を社会へ還元するための応用能力の獲得を目的として設置している。</u>これにより、<u>高度スポーツ医科学特講では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）を学び、博士課程後期の研究として、研究課題の焦点化に資する専門知識を身につける。</u>同時に、当該学問分野における最前線の解析方法や研究事例に触れ、研究を独創的かつ創造的に遂行する能力を育成する。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(④ 八田 有洋・⑤ 山田 洋・⑥ 内山 秀一・⑦ 宮崎 誠司／2回) (共同)</p> <p>第1回授業では、本科目で扱う研究領域である、最新のス</p>	<p>(概要)</p> <p>高度スポーツ医科学特講では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）を学び、研究課題の焦点化に資する基礎知識を身につける。同時に、当該学問分野における最前線の解析方法や研究事例に触れ、研究を独創的かつ創造的に遂行する能力を育成する。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(4 八田 有洋・5 山田 洋・6 内山 秀一・7 宮崎 誠司／2回) (共同)</p> <p>第1回授業では、本科目で扱う研究領域である、最新のス</p>

<p>ポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学などについて概説する。そして、第14回授業では、全体のまとめとして、<u>研究テーマの確定に向けた意見交換等を行うとともに、3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含め解説する。そして、修士課程から身に付けてきた、本領域における専門的な知見と幅広い視点、そして他分野との融合を含め、自らの研究テーマとの関連性について再検証を行い、レポートの作成、ディスカッションを行う。</u></p> <p><略></p>	<p>ポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学などについて概説する。そして、第14回授業では、全体のまとめとして、研究テーマの確定に向けた意見交換等を行う。</p> <p><略></p>
--	---

(新旧対照表) 授業科目の概要「高度実践スポーツ科学特講」

新	旧
<p>(概要)</p> <p><u>専門区分科目は、修士課程における専門科目で学んだ各領域の多数の科目を包括的に捉えて統合し、さらに高度化させると共に、研究成果を社会へ還元するための応用能力の獲得を目的として設置している。これにより、高度実践スポーツ科学特講では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会・国民に果たす具体的な意義について、<u>修士課程より研究範囲を広げ国内外の様々な先端研究のエビデンスから考究する。特に、ウエルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツをキーワードとして、それぞれの分野の最新の研究動向やビジネスへの応用について、修士課程より深めた解説から、現代社会・国民と地域の発展に役立つ研究を遂行できる能力とマネジメント力を駆使した創造性を育成する。</u></u></p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(⑧ 久保田 晃生・⑨ 萩 裕美子・⑩ 野坂 俊弥・⑪ 吉岡 尚美/2回) (共同)</p> <p>第1回授業では、現代社会・国民に役立つ研究を遂行できる能力とマネジメント力を駆使した創造性を養うことを目的に、本科目で扱う研究領域と役割、そして関連性について概説する。そして、第14回授業では、全体のまとめとして、<u>研究テーマの確定に向けた意見交換等を行うとともに、3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含め解説する。そして、修士課程から身に付けてきた、本領域における専門的な知見と幅広い視点、そして他分野との融合を含め、自らの研究テーマとの関連性について再</u></p>	<p>(概要)</p> <p>高度実践スポーツ科学特講では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会・国民に果たす具体的な意義について、国内外の様々な先端研究のエビデンスから考究する。特に、ウエルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツをキーワードとして、それぞれの分野の最新の研究動向やビジネスへの応用を解説し、現代社会・国民に役立つ研究を遂行できる能力とマネジメント力を駆使した創造性を育成する。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(8 久保田 晃生・9 萩 裕美子・10 野坂 俊弥・11 吉岡 尚美/2回) (共同)</p> <p>第1回授業では、現代社会・国民に役立つ研究を遂行できる能力とマネジメント力を駆使した創造性を養うことを目的に、本科目で扱う研究領域と役割、そして関連性について概説する。そして、第14回授業では、全体のまとめとして、研究テーマの確定に向けた意見交換等を行う。</p>

<p>検証を行い、レポートの作成、ディスカッションを行う。</p> <p>(⑧ 久保田 晃生/3回)</p> <p>第2～4回授業では、健康づくり・介護予防における身体活動の役割について、<u>修士課程より研究範囲を広めた先端研究の成果に基づき考究する。また、この分野で具体的に研究を進めていく方法について解説する。</u></p> <p>(⑨ 萩 裕美子/3回)</p> <p>第5～7回授業では、スポーツ・レジャーにおけるマネジメントに関する国内外の先端研究を考究するとともに、<u>スポーツ・レジャーが果たす社会的役割、スポーツ・レジャー政策の評価について解説し、研究に落とし込む方法として質的研究、量的研究、混合研究がどう使えるのか、課題解決にどう役立てられるかを解説する。</u></p> <p>(⑩ 野坂 俊弥/3回)</p> <p>第8～10回授業では、<u>ウェルネス 概念の始祖であるハルバート・ダンの原著 “High Level Wellness”に触れ、それを具現した全米ウェルネス会議(National Wellness Conference)の歴史と現況について理解する。転じて、我が国における国民健康づくり対策「健康日本21(第2次)」とそこに至る施策の変遷について世界的視野から考究することにより、今後の方策の方向性について議論する。</u></p> <p><略></p>	<p>(8 久保田 晃生/3回)</p> <p>第2～4回授業では、健康づくり・介護予防における身体活動の役割について、<u>先端研究の成果に基づき考究する。また、この分野で具体的に研究を進めていく方法について解説する。</u></p> <p>(9 萩 裕美子/3回)</p> <p>第5～7回授業では、スポーツ・レジャーにおけるマネジメントに関する国内外の先端研究を考究するとともに、<u>社会の動向を踏まえたスポーツやレジャーの役割を再考し、今後に向けた研究課題を解説する。</u></p> <p>(10 野坂 俊弥/3回)</p> <p>第8～10回授業では、ウェルネスをはじめとする健康関連概念の起源と変遷について考究することを通じ、<u>必要な科学的エビデンスを交えて国民に説明できる能力を養成する。</u></p> <p><略></p>
---	--

(新旧対照表) 授業科目の概要「高度スポーツ文化社会科学演習」

新	旧
<p>(概要)</p> <p><u>専門区分科目は、修士課程における専門科目で学んだ各領域の多数の科目を包括的に捉えて統合し、さらに高度化させると共に、研究成果を社会へ還元するための応用能力の獲得を目的として設置している。これにより、高度スポーツ文化社会科学演習では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における人文社会科学的アプローチ(体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学)によって問題解決能力の拡充をはかるとともに、これを通して研究を独創的に遂行する能力を高める。本科目においては、<u>修士課程で獲得された一般的研究能力における人文社会科学的認識・思考能力のさらなる洗練のために、最前線の議論や知見を踏まえながら、広大で歴史的な知の総体において自らの問題追求を相対化することで、研究者としての学識や良識</u></u></p>	<p>(概要)</p> <p>高度スポーツ文化社会科学演習では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における人文社会科学的アプローチ(体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学)によって問題解決能力の拡充をはかるとともに、これを通して研究を独創的に遂行する能力を高める。本科目においては、<u>最前線の議論や知見を踏まえながら、広大で歴史的な知の総体において自らの問題追求を相対化することで、研究者としての学識や良識の錬磨と高度な研究スキルを身に付ける。</u></p>

<p>の錬磨と高度な研究スキルを身に付ける。<u>さらに、教育研究における他の分野との融合を推進するため、隣接する分野(社会学・歴史学等)の専門家・学生と協同したパネルディスカッションを行う。</u></p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(① 阿部 悟郎・② 松浪 稔・③ 松本 秀夫/2回)(共同)</p> <p>第1回授業では、本科目で扱う演習内容について、現代社会における課題等について問題提起し人文社会学的なアプローチ方法について概説する。第14回授業では、履修者による発表・討議を中心とした授業全体の総括を行うとともに、<u>隣接する分野(社会学・歴史学等)の専門家・学生と協同したパネルディスカッションにより意見交換を行う。これにより、論文の作成能力や発表力の向上を目指すだけではなく、自分の研究テーマについて広い視点で俯瞰的に見直しを行い、より独創性と創造性の高い研究の実現を目指していく。</u></p> <p>(① 阿部 悟郎/4回)</p> <p>第2～5回授業では、<u>「高度スポーツ文化社会科学特講」の体育スポーツ哲学領域において得られた純粋哲学領域に関する諸理論の相互連関に基づいて、主題を体育本質論に絞り込み、いわゆる教育哲学の代表的な諸理論に焦点化して、とりわけ精神科学的教育学、教育人間学、実存哲学的教育学、人文主義的教育学を段階的に検討し、体育本質論の構成のための深い認識を養成していく。具体的には、体育哲学の思想的源泉の一つとしての精神科学的教育学の現代的可能性を踏まえたうえで、その思想類型としての教育人間学と実存哲学的教育学に目を向けながら、体育本質論の構成における人文主義的教育学の現代的可能性を模索していく。</u></p> <p><略></p> <p>(③ 松本 秀夫/4回)</p> <p>第10～13回授業は、<u>「高度スポーツ文化社会科学特講」のスポーツ心理学領域において学んだ、心理的指標・生理的指標による最新のスポーツ心理学のアプローチによって、スポーツ・レジャー関与と情動・動機づけ・ライフスタイル変容・幸福感についての研究計画を立案する。</u></p>	<p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(1 阿部 悟郎・2 松浪 稔・3 松本 秀夫/2回)(共同)</p> <p>第1回授業では、本科目で扱う演習内容について、現代社会における課題等について問題提起し人文社会学的なアプローチ方法について概説する。第14回授業では、履修者による発表・討議を中心とした授業全体の総括を行う。</p> <p>(1 阿部 悟郎/4回)</p> <p>第2～5回授業では、体育哲学の思想的源泉の一つとしての精神科学的教育学の現代的可能性を踏まえたうえで、その思想類型としての教育人間学と実存哲学的教育学に目を向けながら、体育本質論の構成における人文主義的教育学の現代的可能性を模索していく。</p> <p><略></p> <p>(3 松本 秀夫/4回)</p> <p>第10～13回授業は、スポーツ心理学のアプローチによる、スポーツ・レジャーの関与と、情動、動機づけ、ライフスタイル変容、幸福感について最新の研究動向を検証・検討する。</p>
--	--

(新旧対照表) 授業科目の概要「高度スポーツ医科学演習」

新	旧
(概要)	(概要)

専門区分科目は、修士課程における専門科目で学んだ各領域の多数の科目を包括的に捉えて統合し、さらに高度化させると共に、研究成果を社会へ還元するための応用能力の獲得を目的として設置している。これにより、高度スポーツ医科学演習では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）の手法によるスポーツ科学実験研究のプロセス（計画→測定→処理→論議）を演習として学ぶ。これらを通じて、当該分野において、質の高い研究テーマ、研究デザイン、データの解釈・考察を行い、修士課程で学修した内容を基礎に、博士課程後期としてふさわしい研究者としての学識や良識の錬磨と、論文執筆を遂行できる高度な研究スキルを身に付ける。さらに、後半の共同の部分で、医学、工学、理学等他分野が融合したプロジェクト研究に参加し、研究能力・成果を社会に還元する力を身につける。

(オムニバス方式／全14回)

(④ 八田 有洋・⑤ 山田 洋・⑥ 内山 秀一・⑦ 宮崎 誠司／6回) (共同)

第1回授業では、本科目で扱う演習内容について、現代社会における課題等について問題提起し自然科学的なアプローチ方法について概説する。第10～14回授業では、医学、工学、理学等の他の分野と融合したプロジェクト研究に参加し、計画・測定・処理・論議の全体を経験・発表し、研究能力・成果を社会に還元する力を身につける。特に、第14回授業においては、プロジェクト研究に参加した結果について、自分の研究テーマと関連した「現状との差異や問題点」などについて発表・意見交換もを行い、より広い視点をもった俯瞰的な見直しを行い、より独創性と創造性の高い研究の実現につなげていくことを目指す。

(④ 八田 有洋／2回)

第2～3回授業では、随意運動と認知過程の関連性について筋電図や脳電位などの電気生理学的指標を用いて検証する。高次脳機能の測定を行うことから、修士課程より高度な内容となっている。

(⑤ 山田 洋／2回)

第4～5回授業では、人間の基本運動の機構を科学的に分析するために必要な知識である運動学（解剖学・生理学・力学）について学び、先端のキネシオロジー研究の理論・手法・成果を修得し、研究者としてスポーツの発展に貢献出来る最

高度スポーツ医科学演習では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）の手法によるスポーツ科学実験研究のプロセス（計画→測定→処理→論議）を演習として学ぶ。これらを通じて、当該分野において、質の高い研究テーマ、研究デザイン、データの解釈・考察を行い、研究者としての学識や良識の錬磨と、論文執筆を遂行できる高度な研究スキルを身に付ける。

(オムニバス方式／全14回)

(4 八田 有洋・5 山田 洋・6 内山 秀一・7 宮崎 誠司／2回) (共同)

第1回授業では、本科目で扱う演習内容について、現代社会における課題等について問題提起し自然科学的なアプローチ方法について概説する。第14回授業では、履修者による発表・討議を中心とした授業全体の総括を行う。

(4 八田 有洋／3回)

第2～4回授業では、随意運動と認知過程の関連性について筋電図や脳電位などの電気生理学的指標を用いて検証する。

(5 山田 洋／3回)

第5～7回授業では、人間の基本運動の機構を科学的に分析するために必要な知識である運動学（解剖学・生理学・力学）について学び、先端のキネシオロジー研究の理論・手法・成果を修得し、研究者としてスポーツの発展に貢献出来る最

<p>先端の知識とスキルの体得を目標とする。<u>最新のモーションキャプチャシステムを駆使して力学的分析を行うことにより、修士課程より高度な内容となっている。</u></p> <p>(⑥ 内山 秀一/2回)</p> <p>第6～7回授業では、運動やトレーニング刺激に対する筋-神経の適応メカニズムの検証方法を身につける。<u>実験動物を用いて筋生理を学び、トレーニング方法の構築等を考える等、修士課程より高度な内容となっている。</u></p> <p>(⑦ 宮崎 誠司/2回)</p> <p>第8～9回授業では、スポーツという外部の刺激に対する生体の機能的な応答、スポーツによって損なわれた病的状態から生まれる生体の機能的な応答、並びに外的操作である薬理的、機能的並びに外科的操作による構造的（解剖学）、機能的（生理学・生化学）修復を解説しそれに対して議論を行う。<u>同時に、治療方法、emergency care for sportsの原理を実習を通じて学ぶことにより、修士課程より高度な内容となっている。</u></p>	<p>先端の知識とスキルの体得を目標とする。</p> <p>(6 内山 秀一/3回)</p> <p>第8～10回授業では、運動やトレーニング刺激に対する筋-神経の適応メカニズムの検証方法を身につける。</p> <p>(7 宮崎 誠司/3回)</p> <p>第11～13回授業では、スポーツという外部の刺激に対する生体の機能的な応答、スポーツによって損なわれた病的状態から生まれる生体の機能的な応答、並びに外的操作である薬理的、機能的並びに外科的操作による構造的（解剖学）、機能的（生理学・生化学）修復を解説しそれに対して議論を行う。</p>
---	--

(新旧対照表) 授業科目の概要「高度実践スポーツ科学演習」

新	旧
<p>(概要)</p> <p><u>専門区分科目は、修士課程における専門科目で学んだ各領域の多数の科目を包括的に捉えて統合し、さらに高度化させると共に、研究成果を社会へ還元するための応用能力の獲得を目的として設置している。これにより、高度実践スポーツ科学演習では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会において貢献しうる研究テーマや研究デザインを、具体的に考案する能力を養う。特に、ウェルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツをキーワードとして、それぞれの分野において、質の高い研究テーマや実現可能な研究デザインを立案し、ビジネスに応用するための最新情報を取り扱う。加えて、対象領域の広い実践スポーツ科学分野の専門家となるため、修士課程で学修した内容を基礎に、博士課程後期としてふさわしい学識や良識の錬磨を図り、自立した研究者になるための高度な研究スキルを身に付ける。また、実践スポーツ科学の担当教員が進めているプロジェクト研究や活動の内容を理解するとともに参加して、中核的に研究に携わることで、博士論文のテーマについての研究を深めていく。</u></p>	<p>(概要)</p> <p>高度実践スポーツ科学演習では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会において貢献しうる研究テーマや研究デザインを、具体的に考案する能力を養う。特に、ウェルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツをキーワードとして、それぞれの分野において、質の高い研究テーマや実現可能な研究デザインを立案し、ビジネスに応用するための最新情報を取り扱う。加えて、対象領域の広い実践スポーツ科学分野の専門家として、学識や良識の錬磨と高度な研究スキルを身に付ける。</p>

<p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(⑧ 久保田 晃生・⑨ 萩 裕美子・⑩ 野坂 俊弥・⑪ 吉岡 尚美／2回) (共同)</p> <p>第1回授業では、本科目で扱う演習内容について、現代社会における課題等について問題提起し、具体的に貢献し得るスポーツや運動についての可能性について概説する。第14回授業においては、プロジェクト研究に参加した結果について、<u>自分の研究テーマと関連した「現状との差異や問題点」などについて発表・意見交換を行い、より広い視点をもった俯瞰的な見直しを行い、より独創性と創造性の高い研究の実現につなげていくことを目指す。</u></p> <p>(⑧ 久保田 晃生／3回)</p> <p>第2～4回授業では、<u>担当教員が取り組む健康づくり・介護予防のための身体活動促進プロジェクト研究を理解するとともに、具体的な参加内容を検討、調整する。</u></p> <p>(⑨ 萩 裕美子／3回)</p> <p>第5～7回授業では、スポーツ・レジャーにおけるマネジメントの課題を現場の視点から考察するために、<u>スポーツイベントの現場を体験し、連携の在り方や方法を考察したり、企業や団体の取り組みを取材してPDCAサイクルの観点からまとめ、社会に貢献できる研究テーマを選び、量的アプローチと質的アプローチの研究デザインを立案する。</u></p> <p>(⑩ 野坂 俊弥／3回)</p> <p>第8～10回授業では、<u>ウェルネス 概念の原著 “High Level Wellness”を講読し、その特異性と普遍性について議論する。また、「健康日本 21 (第2次)」との類似点および相違点について議論し、健康教育および保健科教育に反映する可能性について議論する。さらに担当教員が事務局長を務める「日本ウェルネス学会」と「日本保健科教育学会」における議論に参加し、それぞれの領域における我が国最先端の専門的教養を獲得する。また、担当教員がアドバイザーを務める全米ウェルネス会議国際委員会のウェブ会議を聴講し、健康関連概念の世界的潮流について理解する。</u></p> <p>(⑪ 吉岡 尚美／3回)</p> <p>第11～13回授業では、<u>アダプテッド体育・スポーツ分野における実践研究テーマの立案と、研究計画・研究方法の検討、改善までを遂行できる能力を培うことをテーマに、実践スポーツ科学の担当教員が進めているプロジェクト研究や活動の内容を理解するとともに実際に参加する。</u></p>	<p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(8 久保田 晃生・9 萩 裕美子・10 野坂 俊弥・11 吉岡 尚美／2回) (共同)</p> <p>第1回授業では、本科目で扱う演習内容について、現代社会における課題等について問題提起し、具体的に貢献し得るスポーツや運動についての可能性について概説する。第14回授業では、履修者による発表・討議を中心とした授業全体の総括を行う。</p> <p>(8 久保田 晃生／3回)</p> <p>第2～4回授業では、健康づくり・介護予防のための身体活動の意義を高めるため、ならびに身体活動を社会や国民に普及するための研究テーマや研究デザインの立案能力を、演習を通じて養う。</p> <p>(9 萩 裕美子／3回)</p> <p>第5～7回授業では、スポーツ・レジャーにおけるマネジメントの課題を現場の視点から考察するために、現場からの情報収集、課題の抽出のための情報分析、分析結果からの解決方法の提案までマーケティングやリサーチ手法を用いて演習を行う。</p> <p>(10 野坂 俊弥／3回)</p> <p>第8～10回授業では、ウェルネスをはじめとする健康関連概念の起源と変遷について考究することを通じ、必要な科学的エビデンスを交えて国民に説明できる能力を養成する。</p> <p>(11 吉岡 尚美／3回)</p> <p>第11～13回授業では、アダプテッド体育・スポーツ分野における研究テーマの立案とデザインの計画方法について、質的研究と量的研究の両面からアプローチする演習を行う。</p>
--	---

<p>プロジェクト研究という実践の場を通じ、自らの研究テーマについての方針・取り組み方などについて再確認をおこなうことに加えて、より高度な専門性、より広い視点の必要性について再確認を行い、第14回目の発表に向けてレポートの作成を行う。</p>	
---	--

(新旧対照表) シラバス「スポーツ科学研究理論」

新	旧
<p>授業要旨または授業概要</p> <p>博士課程後期においては、コースワークとして、スポーツ文化社会科学・スポーツ医科学・実践スポーツ科学の3領域において専門科目を開設し、その科目の担当者がそれぞれリサーチワークである特別研究科目を開設している。</p> <p>スポーツ科学研究理論では、特別研究科目の担当者が、それぞれの分野の<u>最新の</u>研究方法論・研究成果の概説を行うことにより、リサーチワークへの導入と研究方法論の理解を促す。また、エビデンスに基づく研究成果、知見、技術などを社会へ還元することを目的に、データマネジメント、データサイエンスの概要についても学ぶ。<u>さらに、全教員が担当することで、他領域の最新情報を踏まえたうえで、体育・スポーツ科学の学際性と領域の広がり</u>を理解する。このことにより<u>研究領域の多様性を認識して広い視野を持ち、体育・スポーツ科学に求められる社会課題を考察できる応用的な力を身につける</u>。博士課程後期で学修を進め、博士論文を作成していくにあたり、<u>自らの研究の指針・考え方を確立していくための基幹となる科目である。</u></p> <p>授業計画</p> <p>◆授業スケジュール</p> <p><略></p> <p>【第2回】スポーツ・レジャーの最先端研究の動向解説及びデータマネジメントの概要、<u>3領域を跨る視点の必要性、体育・スポーツ科学分野だけではない幅広い視点と他分野との融合の必要性について説明</u>（萩）</p> <p><略></p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p>【第2回】スポーツ・レジャー研究とデータマネジメント理</p>	<p>授業要旨または授業概要</p> <p>博士課程後期においては、コースワークとして、スポーツ文化社会科学・スポーツ医科学・実践スポーツ科学の3領域において専門科目を開設し、その科目の担当者がそれぞれリサーチワークである特別研究科目を開設している。</p> <p>スポーツ科学研究理論では、特別研究科目の担当者が、それぞれの分野の研究手法論・研究成果の概説を行うことにより、リサーチワークへの導入と研究方法論の理解を促す。また、エビデンスに基づく研究成果、知見、技術などを社会へ還元することを目的に、データマネジメント、データサイエンスの概要についても学ぶ。</p> <p>授業計画</p> <p>◆授業スケジュール</p> <p><略></p> <p>【第2回】スポーツ・レジャーの最先端研究の動向解説及びデータマネジメントの概要説明（萩）</p> <p><略></p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p>【第2回】スポーツ・レジャー研究とデータマネジメント理</p>

<p>解、3領域を跨る視点の必要性、体育・スポーツ科学分野だけではない幅広い視点と他分野との融合の必要性への理解 (200分)</p> <p>予習：スポーツ・レジャー研究にはどのようなものがあるか調べる</p> <p>体育・スポーツ科学と他分野との連携について事例を調べる (50分)</p> <p>復習：スポーツ・レジャー研究とデータマネジメントについて理解したこと、3領域を跨る視点の必要性、体育・スポーツ科学分野だけではない幅広い視点と他分野との融合の必要性をレポートする (150分)</p>	<p>解 (200分)</p> <p>予習：スポーツ・レジャー研究にはどのようなものがあるか調べる (50分)</p> <p>復習：スポーツ・レジャー研究とデータマネジメントについて理解したことをレポートする (150分)</p>
--	---

(新旧対照表) シラバス「高度スポーツ文化社会科学特講」

新	旧
<p>授業主旨または授業概要</p> <p>高度スポーツ文化社会科学特講では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における人文社会科学的アプローチ(体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学)によって問題把握の多角化をはかるとともに、これを通して研究を独創的に遂行する能力を育成する。なお、本科目においては、<u>体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学における最前線の議論や知見に触れ、修士課程で獲得された一般的研究能力における人文社会科学的認識・思考能力の洗練を通じて、学識と思考力を拡充し、研究者としての高度な創造性を養う。</u></p> <p>授業計画</p> <p>◆授業スケジュール</p> <p><略></p> <p>【第2回】体育・スポーツ事象と哲学的思考の有効性(阿部) <u>ここからの体育スポーツ哲学領域の授業は、修士課程の人文社会科学的領域の授業において得られた哲学・倫理学領域の認識に基づいて、純粋哲学領域に関する諸理論の相互連関を段階的に検討していく。</u></p> <p><略></p> <p>【第5回】体育・スポーツ哲学とその哲学的源泉：<u>実存哲学と人文主義的方向の可能性(阿部)</u> <u>ここでは、純粋哲学領域に関する深い認識と諸理論の相互連関の段階的検討の暫定的な収束点として、実存哲学とその展</u></p>	<p>授業主旨または授業概要</p> <p>高度スポーツ文化社会科学特講では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における人文社会科学的アプローチ(体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学)によって問題把握の多角化をはかるとともに、これを通して研究を独創的に遂行する能力を育成する。なお、本科目においては、<u>体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学における最前線の議論や知見に触れ、学識と思考力を拡充し創造性を養う。</u></p> <p>授業計画</p> <p>◆授業スケジュール</p> <p><略></p> <p>【第2回】体育・スポーツ事象と哲学的思考の有効性(阿部)</p> <p><略></p> <p>【第5回】体育・スポーツ哲学とその哲学的源泉としての人文主義的方向の可能性(阿部)</p>

<p><u>開形態としての人文主義を検討していく。</u></p> <p>【第6回】スポーツ史学・スポーツ人類学の背景と課題・展望（松浪） <u>スポーツ史・スポーツ人類学の誕生とその背景／ブランチャード、チェスカのスポーツ人類学／スポーツ史の現代的課題／スポーツ人類学の現代的課題</u></p> <p>【第7回】スポーツ文化論のパースペクティブ（松浪） <u>近代史にあらわれるスポーツ文化／現代史にあらわれるスポーツ文化／アレン・グットマン再考</u></p> <p>【第8回】「スポーツ」とは何か？「スポーツ」・「遊び」概念の再検討（松浪） <u>ジレの「スポーツ」の概念の再考／ホイジンガ、カイヨワの「遊び」概念の再考</u></p> <p>【第9回】「身体」とは何か？ 身体論へのアプローチ（松浪） <u>湯浅 泰雄・市川 浩の身体論／近代的身体の形成過程</u></p> <p>【第10回】スポーツ心理学の歴史的背景と研究の方向性（松本） <u>体育・健康・スポーツ（競技・生涯・障害）・レジャーを対象とし心理学研究の歴史的背景を踏まえ、その関係性から現在のスポーツ心理学の課題と展望を検討する</u></p> <p>【第11回】スポーツ・レジャーにおける量的スポーツ心理学研究の動向と課題（松本） <u>配票・インターネットによる心理尺度を使用した高度な量的研究の方法および統計解析を理解し、質的研究との関係を含めた量的研究の役割を理解する</u></p> <p>【第12回】スポーツ・レジャーにおける質的スポーツ心理学研究の動向と課題（松本） <u>フィールドワークによる面接・観察を用いた高度な質的研究の方法および解析を理解し、量的研究との関係を含めた質的研究の役割を理解する</u></p> <p>【第13回】スポーツ・レジャーにおける生理的指標を用いた研究動向と課題（松本） <u>最新の生理的指標について知識を深め、心理的指標（心理尺度）と生理指標を複合させた高度なスポーツ心理学研究を理解する</u></p> <p>【第14回】体育学における人文社会科学の展望と課題：研究テーマの確定に向けて、<u>3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含めた解説、自らの研究テーマとの関連性について再検証、ディスカッション</u> （阿部・松浪・松本）</p>	<p>【第6回】スポーツ史学・スポーツ人類学の背景と課題・展望（松浪）</p> <p>【第7回】スポーツ文化論のパースペクティブ（松浪）</p> <p>【第8回】「スポーツ」とは何か？「スポーツ」・「遊び」概念の再検討（松浪）</p> <p>【第9回】「身体」とは何か？ 身体論へのアプローチ（松浪）</p> <p>【第10回】スポーツ心理学の歴史的背景と研究の方向性（松本）</p> <p>【第11回】スポーツ・レジャーにおける量的スポーツ心理学研究の動向と課題（松本）</p> <p>【第12回】スポーツ・レジャーにおける質的スポーツ心理学研究の動向と課題（松本）</p> <p>【第13回】スポーツ・レジャーにおける生理的指標を用いた研究動向と課題（松本）</p> <p>【第14回】体育学における人文社会科学の展望と課題：研究テーマの確定に向けて（阿部・松浪・松本）</p>
--	---

<p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p><略></p> <p>【第2回】<u>体育・スポーツ事象と哲学的思考の有効性</u> (200分)</p> <p>予習：<u>体育・スポーツ哲学の知的源泉としての代表的哲学(観念論、実在論、自然主義、プラグマティズム、実存哲学)</u>について調べておくこと。(100分)</p> <p>復習：<u>代表的な哲学のそれぞれに立脚した体育論を構成して</u>みること。</p> <p><略></p> <p>【第5回】<u>実存哲学と人文主義的方向の可能性</u> (200分)</p> <p><略></p> <p>【第10回】<u>スポーツ心理学の歴史的背景と研究の方向性</u> (200分)</p> <p>予習：<u>体育・健康・スポーツ(競技・生涯・障害)、レジャーを対象とした心理学研究の歴史的背景と関係を調べる</u> (100分)</p> <p>復習：<u>現在のスポーツ心理学の課題と展望についてレポート</u>にまとめる (100分)</p> <p>【第11回】<u>スポーツ・レジャーにおける量的スポーツ心理学研究</u> (200分)</p> <p>予習：<u>スポーツ・レジャーを対象に作成された心理尺度による最新研究</u>について調べる (100分)</p> <p>復習：<u>最新の心理的指標(心理尺度)による分析と統計解析</u>についての理解を深めレポートにまとめる (100分)</p> <p>【第12回】<u>スポーツ・レジャーにおける質的スポーツ心理学研究</u> (200分)</p> <p>予習：<u>スポーツ・レジャーを対象とした最新の面接・観察の方法と解析</u>について調べる (100分)</p> <p>復習：<u>最新の面接・観察の解析方法</u>についての理解を深めレポートにまとめる (100分)</p> <p>【第13回】<u>スポーツ・レジャーにおける生理的指標を用いたスポーツ心理学研究</u> (200分)</p> <p>予習：<u>スポーツ・レジャーにおける生理的指標を用いた最新スポーツ心理学研究</u>について調べる (100分)</p> <p>復習：<u>生理的指標についての理解を深め、心理的指標(心理尺度)の違いと関係</u>についてレポートにまとめる (100分)</p> <p>【第14回】<u>体育学における人文社会科学の展望と課題</u> (200</p>	<p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p><略></p> <p>【第2回】<u>体育・スポーツ事象と哲学的思</u> (200分)</p> <p>予習：<u>体育・スポーツ哲学における四大哲学</u>について調べておくこと。(100分)</p> <p>復習：<u>四大哲学のそれぞれに立脚した体育論を構成</u>してみること。(100分)</p> <p><略></p> <p>【第5回】<u>人文主義的方向の可能性</u> (200分)</p> <p><略></p> <p>【第10回】<u>スポーツ心理学の歴史的背景</u> (200分)</p> <p>予習：<u>スポーツ心理学研究の果たす役割</u>について調べる (100分)</p> <p>復習：<u>スポーツ心理学の役割と研究の関係</u>についてレポートにまとめ (100分)</p> <p>【第11回】<u>スポーツ・レジャーにおける量的スポーツ心理学研究</u> (200分)</p> <p>予習：<u>スポーツ・レジャーを対象に作成された心理尺度</u>について調べる (100分)</p> <p>復習：<u>心理尺度の作り方</u>についての理解を深めレポートにまとめる (100分)</p> <p>【第12回】<u>スポーツ・レジャーにおける質的スポーツ心理学研究</u> (200分)</p> <p>予習：<u>スポーツ・レジャーにおける面接・観察手法</u>とその解析方法について調べる (100分)</p> <p>復習：<u>面接・観察の解析方法</u>についての理解を深めレポートにまとめる (100分)</p> <p>【第13回】<u>スポーツ・レジャーにおける生理的指標を用いたスポーツ心理学研究</u> (200分)</p> <p>予習：<u>スポーツ・レジャーにおける心理学の生理的指標</u>について調べる (100分)</p> <p>復習：<u>生理的指標の器機等の使用方法</u>について理解を深めるレポートにまとめる (100分)</p> <p>【第14回】<u>体育学における人文社会科学の展望と課題</u> (200</p>
--	---

<p>分)</p> <p>予習：自分が所属する専門領域の最前線の議論（内外）を調べておくこと。(100分)</p> <p>復習：<u>体育学における人文社会科学の展望と課題、3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含めた解説、自らの研究テーマとの関連性について再検証、ディスカッションを踏まえ、自分が所属する専門領域の可能性と意義について考察し、レポートにまとめる。</u>(100分)</p>	<p>分)</p> <p>予習：自分が所属する専門領域の最前線の議論（内外）を調べておくこと。(100分)</p> <p>復習：復習：体育学における人文社会科学の展望と課題を踏まえ、自分が所属する専門領域の可能性と意義について考察すること。(100分)</p>
--	--

(新旧対照表) シラバス「高度スポーツ医科学特講」

新	旧
<p>授業要旨または授業概要</p> <p>高度スポーツ医科学特講では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）を学び、<u>博士課程後期の研究として、研究課題の焦点化に資する専門知識を身につける。</u>同時に、当該学問分野における最前線の解析方法や研究事例に触れ、研究を独創的かつ創造的に遂行する能力を育成する。</p> <p>授業計画</p> <p>◆授業スケジュール</p> <p>【第1回】自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）における<u>専門知識の概説</u>（八田、山田、内山、宮崎）</p> <p><略></p> <p>【第14回】全体のまとめとして、研究テーマの確定に向けた意見交換、<u>3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含めた解説、自らの研究テーマとの関連性について再検証、ディスカッション</u>（八田、山田、内山、宮崎）</p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p>【第1回】自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）における基礎知識の概説（200分）</p>	<p>授業要旨または授業概要</p> <p>高度スポーツ医科学特講では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）を学び、研究課題の焦点化に資する基礎知識を身につける。同時に、当該学問分野における最前線の解析方法や研究事例に触れ、研究を独創的かつ創造的に遂行する能力を育成する。</p> <p>授業計画</p> <p>◆授業スケジュール</p> <p>【第1回】自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）における基礎知識の概説（八田、山田、内山、宮崎）</p> <p><略></p> <p>【第14回】全体のまとめとして、研究テーマの確定に向けた意見交換等（八田、山田、内山、宮崎）</p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p>【第1回】自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）における基礎知識の概説（200分）</p>

<p>予習：自然科学的アプローチにおける<u>専門知識</u>についてまとめる。(100分)</p> <p>復習：自然科学的アプローチにおける<u>専門知識</u>について、授業をもとに復習する。(100分)</p> <p><略></p> <p>【第14回】まとめ、研究テーマの確定に向けた意見交換、<u>3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含めた解説、自らの研究テーマとの関連性について再検証、ディスカッション</u> (200分)</p> <p>予習：これまで習得した自然科学的研究手法の復習。(100分)</p> <p>復習：<u>3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含めた解説、自らの研究テーマとの関連性について再検証、ディスカッションを踏まえ、研究テーマに関する総合的レポート作成</u> (100分)</p>	<p>予習：自然科学的アプローチにおける基礎知識についてまとめる。(100分)</p> <p>復習：自然科学的アプローチにおける基礎知識について、授業をもとに復習する。(100分)</p> <p><略></p> <p>【第14回】まとめ、研究テーマの確定に向けた意見交換等(200分)</p> <p>予習：これまで習得した自然科学的研究手法の復習。(100分)</p> <p>復習：研究テーマに関する総合的レポート。(100分)</p>
--	--

(新旧対照表) シラバス「高度実践スポーツ科学特講」

新	旧
<p>授業主旨または授業概要</p> <p>高度実践スポーツ科学特講では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会・国民に果たす具体的な意義について、<u>修士課程より研究範囲を広げ国内外の様々な先端研究のエビデンスから考究する。特に、ウエルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツをキーワードとして、それぞれの分野の最新の研究動向やビジネスへの応用について、修士課程より深めた解説から、現代社会・国民と地域の発展に役立つ研究を遂行できる能力とマネジメント力を駆使した創造性を育成する。</u></p> <p>学修の到達目標</p> <p><略></p> <p>◆学修の到達目標</p> <p>本科目は、体育学研究科博士課程後期のディプロマ・ポリシーのうち、特に体育・スポーツ科学領域において、<u>修士課程より研究範囲を広げた国内外の様々な実践スポーツ科学に関連する先端研究の検索方法（入手先）、最新の研究動向を理解することを目標とする。</u></p> <p>授業計画</p>	<p>授業主旨または授業概要</p> <p>高度実践スポーツ科学特講では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会・国民に果たす具体的な意義について、国内外の様々な先端研究のエビデンスから考究する。特に、ウエルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツをキーワードとして、それぞれの分野の最新の研究動向やビジネスへの応用を解説し、現代社会・国民に役立つ研究を遂行できる能力とマネジメント力を駆使した創造性を育成する。</p> <p>学修の到達目標</p> <p><略></p> <p>◆学修の到達目標</p> <p>本科目は、体育学研究科博士課程後期のディプロマ・ポリシーのうち、特に体育・スポーツ科学領域において、国内外の様々な実践スポーツ科学に関連する先端研究の検索方法（入手先）、最新の研究動向を理解することを目標とする。</p> <p>授業計画</p>

<p>◆授業スケジュール</p> <p><略></p> <p>【第2回】健康づくり・介護予防として身体活動を実践する社会的意義について、主に <u>The Lancet</u> や <u>The Journal of the American Medical Association</u> などの雑誌を手がかりとして、先端研究の動向を文献検索するとともに考証する。(久保田)</p> <p>【第3回】健康づくり・介護予防として身体活動を実践させる具体的な取り組みについて、主に <u>BMC Public Health</u> や <u>International Society for Physical Activity and Health</u> などの雑誌を手がかりとして、先端研究の動向を文献検索するとともに考証する。(久保田)</p> <p>【第4回】健康づくり・介護予防の身体活動の研究について、不足していることや課題を明らかとし、今後取り組むべき研究を議論する。(久保田)</p> <p>【第5回】スポーツ・レジャーマネジメント研究について、国内外の動向を理解するとともに、今日的課題は何かを明らかにする。また、スポーツ・レジャーが果たす社会的役割について考察を深め、エビデンスの構築に資する研究とはどのようなものかを解説する。(萩)</p> <p>【第6回】スポーツ・レジャー政策にはどのようなものがあるかを整理し、これらの政策が有効に活用されているかどうかを、マネジメントの視点から議論する。(萩)</p> <p>【第7回】スポーツ・レジャーマネジメント研究のアプローチの方法として質的研究、量的研究、混合研究がどのようなエビデンスを構築することができるのか、またそれがどのような課題解決につながるかを理解するかを議論し、そのために必要なものは何かを理解する。(萩)</p> <p>【第8回】ウェルネス理論の概要について理解する。すなわち、ハルバート・ダンの“High Level Wellness”の内容について概読し理解する。また、ダン・アーデルや野崎康明の構成要素区分の相違点について触れ、わが国と諸外国との文化的相違について考察する。(野坂)</p> <p>【第9回】全米ウェルネス会議(National Wellness Conference)が開始された背景と、ジョン・トラビスおよびビル・ヘトラーの功績や彼らの哲学を理解すると共に、その会議の現況について学習する(野坂)</p> <p>【第10回】わが国の健康増進施策である「健康日本21(第2次)」の概要を復習し、施策の歴史的背景と変遷について理解する。そのような施策が、WHOの示す「健康」の定義か</p>	<p>◆授業スケジュール</p> <p><略></p> <p>【第2回】健康づくりの身体活動の研究について、国内外の動向を理解する(久保田)</p> <p>【第3回】介護予防の身体活動の研究について、国内外の動向を理解する(久保田)</p> <p>【第4回】健康づくり・介護予防の身体活動の研究について、不足していることや課題を理解する(久保田)</p> <p>【第5回】スポーツ・レジャーマネジメント研究について、国内外の動向を理解する(萩)</p> <p>【第6回】スポーツ・レジャーマネジメントの今日的課題は何か。スポーツ政策やガバナンス、スポーツビジネスとの関連を考究する(萩)</p> <p>【第7回】スポーツ・レジャーマネジメント研究が社会にどのように貢献しうるのかを議論し、そのために必要なものは何かを理解する(萩)</p> <p>【第8回】健康・保健に関連する概念とそれを取り巻く議論について理解する(野坂)</p> <p>【第9回】人類の幸福(well-being)に向けた健康の考え方について多方面の知識を獲得する(野坂)</p> <p>【第10回】教育機関における健康・保健の位置と歴史について知識を獲得し、その課題について理解する(野坂)</p>
---	---

<p>ら発展する経過を理解する（野坂）</p> <p>【第 11 回】<u>アダプテッド体育・スポーツ分野について、主に Adapted Physical Activity Quarterly とアダプテッド・スポーツ科学を手がかりとして、国内外の先端研究の動向を分析し、アダプテッド・スポーツの社会的役割について議論する。</u></p> <p>（吉岡）</p> <p>【第 12 回】<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の多様性と学際性を持つ強みと課題を考究し、「アダプテッド・スポーツ」を地域社会に定着させるために必要な取り組みについて議論する。</u>（吉岡）</p> <p>【第 13 回】<u>障害種別ごとの実践研究について、特にその妥当性と汎用性について議論し、今後の研究課題の可能性と方法を探る。</u>（吉岡）</p> <p>【第 14 回】<u>全体のまとめとして、研究テーマの確定に向けた意見交換等、3 領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含めた解説、自らの研究テーマとの関連性について再検証、ディスカッション</u>（久保田、萩、野坂、吉岡）</p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p><略></p> <p>【第 2 回】<u>健康づくり・介護予防の身体活動研究の理解 1</u>（200 分）</p> <p>予習：<u>健康づくり・介護予防の身体活動の効果について、レビュー論文等から国内外の動向を確認する。</u>（100 分）</p> <p>復習：<u>健康づくり・介護予防の身体活動の効果について、考察を深めまとめる。</u>（100 分）</p> <p>【第 3 回】<u>健康づくり・介護予防の身体活動研究の理解 2</u>（200 分）</p> <p>予習：<u>健康づくり・介護予防の身体活動を実践させる具体的な取り組みについて、レビュー論文等から国内外の動向を確認する。</u>（100 分）</p> <p>復習：<u>健康づくり・介護予防の身体活動を実践させる具体的な取り組みについて、考察を深めまとめる。</u>（100 分）</p> <p>【第 4 回】<u>健康づくり・介護予防の身体活動研究の課題</u>（200 分）</p> <p>予習：<u>第 2 回、第 3 回の授業を振り返り、疑問が生じた事柄</u></p>	<p>【第 11 回】<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の研究について、国内の動向を理解する。</u>（吉岡）</p> <p>【第 12 回】<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の研究について、国外の動向を理解する。</u>（吉岡）</p> <p>【第 13 回】<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の研究における課題を理解する。</u>（吉岡）</p> <p>【第 14 回】<u>全体のまとめとして、研究テーマの確定に向けた意見交換等</u>（久保田、萩、野坂、吉岡）</p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p><略></p> <p>【第 2 回】<u>健康づくりの身体活動研究の理解</u>（200 分）</p> <p>予習：<u>健康づくりに関する身体活動の日本の施策を把握する</u>（100 分）</p> <p>復習：<u>健康づくりに関する身体活動の先端研究で、興味のあるいくつかの研究の内容を説明できるように取りまとめる</u>（100 分）</p> <p>【第 3 回】<u>介護予防の身体活動研究の理解</u>（200 分）</p> <p>予習：<u>介護予防に関する身体活動の日本の施策を把握する</u>（100 分）</p> <p>復習：<u>介護予防に関する身体活動の先端研究で、興味のあるいくつかの研究の内容を説明できるように取りまとめる</u>（100 分）</p> <p>【第 4 回】<u>健康づくり・介護予防に関する研究課題について</u>（200 分）</p> <p>予習：<u>健康づくり・介護予防に関する WHO の施策を把握する</u></p>
---	---

<p>についてまとめる。(100分)</p> <p>復習：<u>健康づくり・介護予防の身体活動研究として、今後求められる研究課題をまとめる。(100分)</u></p> <p>【第5回】スポーツ・レジャーマネジメント研究の理解(200分)</p> <p>予習：<u>スポーツ・レジャーマネジメントに関する研究を検索してくる。(100分)</u></p> <p>復習：<u>スポーツ・レジャーが果たす社会的役割について考察を深めまとめる。(100分)</u></p> <p>【第6回】スポーツ・レジャー<u>政策と評価</u></p> <p>予習：<u>スポーツ・レジャー政策について国内外の資料を収集してくる。(100分)</u></p> <p>復習：<u>スポーツ・レジャーの政策評価をマネジメントの視点から行い整理する。(100分)</u></p> <p>【第7回】スポーツ・レジャーマネジメント研究へのアプローチ(200分)</p> <p>予習：<u>質的研究、量的研究、混合研究を用いたスポーツ・レジャー研究を検索する。(100分)</u></p> <p>復習：<u>どのようなエビデンスが構築できるのか。またそれらがどのような社会課題を解決するのかをまとめる。(100分)</u></p> <p>【第8回】健康・保健に関連する概念とそれを取り巻く議論の理解(200分)</p> <p>予習：<u>「ウェルネス」の名称を冠した組織、商品、イベントなどの名称とその内容をまとめる(100分)</u></p> <p>復習：<u>「ウェルネス」の取り組みには国内外でなぜ相違があるのか、自身の知見・意見をまとめる(100分)</u></p> <p>【第9回】人類の幸福(well-being)に向けた健康についての知識の獲得(200分)</p> <p>予習：<u>全米ウェルネス会議(National Wellness Conference)のウェブサイトから、その歴史や活動内容を調べてまとめる(100分)</u></p> <p>復習：<u>全米ウェルネス研究所(National Wellness Institute)、日本ウェルネス学会、日本ウェルネス協会の活動内容をまとめる(100分)</u></p> <p>【第10回】教育機関における健康・保健の位置と歴史に関する知識の獲得とその課題についての理解(200分)</p> <p>予習：<u>「健康日本21(第2次)」およびそれ以前の健康増進施策を復習する(100分)</u></p>	<p>(100分)</p> <p>復習：健康づくり・介護予防に関して、今後求められる研究課題をまとめる(100分)</p> <p>【第5回】スポーツ・レジャーマネジメント研究の理解(200分)</p> <p>予習：スポーツ・レジャーマネジメントに関する研究を検索してくる(100分)</p> <p>復習：スポーツ・レジャーマネジメントに関する研究動向と課題をまとめる(100分)</p> <p>【第6回】スポーツ・レジャーマネジメントの今日的課題の理解</p> <p>予習：スポーツ・レジャーマネジメントにおける社会的課題をまとめてくる(100分)</p> <p>復習：スポーツ・レジャーマネジメントにおける社会課題を解決するために、研究としてはどのような研究課題があるかをまとめてくる(100分)</p> <p>【第7回】スポーツ・レジャーマネジメント研究への期待(200分)</p> <p>予習：スポーツ・レジャーマネジメントが社会に与える影響を調べる(100分)</p> <p>復習：スポーツ・レジャーマネジメント研究として社会に貢献できることは何かを整理してまとめる(100分)</p> <p>【第8回】健康・保健に関連する概念とそれを取り巻く議論の理解(200分)</p> <p>予習：健康・保健関連の概念と議論について検索する(100分)</p> <p>復習：健康・保健の現状について自分の意見をまとめる(100分)</p> <p>【第9回】人類の幸福(well-being)に向けた健康についての知識の獲得(200分)</p> <p>予習：well-beingとはどのようなことか、情報をまとめる(100分)</p> <p>復習：自分が考えるwell-beingについて説明できるように意見をまとめる(100分)</p> <p>【第10回】教育機関における健康・保健の位置と歴史に関する知識の獲得とその課題についての理解(200分)</p> <p>予習：教育機関における健康・保健について検索する(100分)</p>
--	---

<p>復習：<u>定義された「健康」とウェルネスの類似点についてまとめる</u> (100分)</p> <p>【第11回】<u>国内外先端研究の動向からみるアダプテッド体育・スポーツの社会的役割の理解</u> (200分)</p> <p>予習：<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の国内外研究について検索する。</u> (100分)</p> <p>復習：<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の国内外研究の動向をまとめ、アダプテッド・スポーツの社会的役割について考察する。</u> (100分)</p> <p>【第12回】<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の課題と今後</u> (200分)</p> <p>予習：<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の多様性と学際性を考察する。</u> (100分)</p> <p>復習：<u>アダプテッド・スポーツの定着に必要な取り組みについてまとめる。</u> (100分)</p> <p>【第13回】<u>障害種別ごとの実践研究における今後の可能性と方法</u> (200分)</p> <p>予習：<u>アダプテッド体育・スポーツの実践研究について検索する。</u> (100分)</p> <p>復習：<u>実践研究における課題と今後のアプローチについてまとめる。</u> (100分)</p> <p>【第14回】<u>まとめ、研究テーマの確定に向けた意見交換等、3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含めた解説、自らの研究テーマとの関連性について再検証、ディスカッション</u> (200分)</p> <p>予習：<u>これまでに学んだウェルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツにおける研究の整理</u> (100分)</p> <p>復習：<u>3領域との関連、体育・スポーツ科学以外の分野との関連性や将来の可能性を含めた解説、自らの研究テーマとの関連性について再検証、ディスカッションを踏まえ、研究テーマに関する総合的レポート作成</u> (100分)</p>	<p>復習：教育機関における健康・保健について自分の意見をまとめる (100分)</p> <p>【第11回】<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の国内研究の理解</u> (200分)</p> <p>予習：アダプテッド体育・スポーツ分野の国内研究について検索する (100分)</p> <p>復習：アダプテッド体育・スポーツ分野の国内研究の動向をまとめる (100分)</p> <p>【第12回】<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の国外研究の理解</u> (200分)</p> <p>予習：アダプテッド体育・スポーツ分野の国外研究について検索する (100分)</p> <p>復習：アダプテッド体育・スポーツ分野の国外研究の動向をまとめる (100分)</p> <p>【第13回】<u>アダプテッド体育・スポーツ研究における課題の理解</u> (200分)</p> <p>予習：アダプテッド体育・スポーツ研究における課題をまとめる (100分)</p> <p>復習：アダプテッド体育・スポーツ研究を進めるためのアプローチについてまとめる (100分)</p> <p>【第14回】<u>まとめ、研究テーマの確定に向けた意見交換等</u> (200分)</p> <p>予習：これまでに学んだウェルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツにおける研究の整理。 (100分)</p> <p>復習：研究テーマに関する総合的レポート。 (100分)</p>
---	--

(新旧対照表) シラバス「高度スポーツ文化社会科学演習」

新	旧
<p>授業要旨または授業概要</p> <p>高度スポーツ文化社会科学演習では、<u>修士課程で獲得された一般的研究能力における人文社会科学的認識・思考能力の一層の洗練のために、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に</u></p>	<p>授業要旨または授業概要</p> <p>高度スポーツ文化社会科学演習では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における人文社会科学的アプローチ (体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、</p>

対する体育学における人文社会科学的アプローチ（体育スポーツ哲学・倫理学、スポーツ史・人類学、スポーツ心理学）によって問題解決能力の拡充をはかるとともに、これを通して研究を独創的に遂行する能力を高める。本科目においては、最前線の議論や知見を踏まえながら、広大で歴史的な知の総体において自らの問題追求を相対化することで、研究者としての学識や良識の錬磨と高度な研究スキルを身に付ける。さらに、教育研究における他の分野との融合を推進するため、隣接する分野（社会学・歴史学等）の専門家・学生と協同したパネルディスカッションを行う。

授業計画

◆授業スケジュール

<略>

【第2回】体育・スポーツ哲学とその思想的源流としてのドイツ教育学：体育本質論の構成と精神科学的教育学の現代的可能性—デュルタイ・シュブランガー・フリットナーを中心として—（阿部）

ここからの体育スポーツ哲学領域の授業は、「高度スポーツ文化社会科学特講」の体育スポーツ哲学領域において得られた純粋哲学領域に関する諸理論の相互連関に基づいて、主題を体育本質論に絞り込み、いわゆる教育哲学の代表的な諸理論に焦点化して、とりわけ精神科学的教育学、教育人間学、実存哲学的教育学、人文主義的教育学を段階的に検討し、体育本質論の構成のための深い認識を養成していく。なお、各々の授業において、主題と教育哲学諸理論の解釈・理解に際しては、純粋哲学領域に関する諸理論の相互連関を人類の理性の知的財産として縦横に活用されたい。

<略>

【第5回】体育・スポーツ哲学とその思想的源流としてのドイツ教育学：体育本質論の構成と人文主義的教育学の現代的可能性—ディースターヴェーク・ジンメル・シュブランガーを中心として—（阿部）

ここでは、教育哲学の代表的な諸理論の段階的検討の暫定的な収束点として、人文主義的教育学を検討していく。

【第6回】オリンピック史と現代社会（松浪）

惨事便乗型資本主義・祝賀資本主義とスポーツ・オリンピック

【第7回】スポーツとメディアの関係史（松浪）

「想像の共同体」（アンダーソン）再考／日本のメディアイベ

スポーツ心理学）によって問題解決能力の拡充をはかるとともに、これを通して研究を独創的に遂行する能力を高める。本科目においては、最前線の議論や知見を踏まえながら、広大で歴史的な知の総体において自らの問題追求を相対化することで、研究者としての学識や良識の錬磨と高度な研究スキルを身に付ける。

授業計画

◆授業スケジュール

<略>

【第2回】体育・スポーツ哲学とその思想的源流としてのドイツ教育学：体育本質論の構成と精神科学的教育学の現代的可能性—デュルタイ・シュブランガー・フリットナーを中心として—（阿部）

<略>

【第5回】体育・スポーツ哲学とその思想的源流としてのドイツ教育学：体育本質論の構成と人文主義的教育学の現代的可能性—ディースターヴェーク・ジンメル・シュブランガーを中心として—（阿部）

【第6回】オリンピック史と現代社会（松浪）

【第7回】スポーツとメディアの関係史（松浪）

<p>ント史</p> <p>【第8回】スポーツのメディア表象（松浪）</p> <p><u>オリンピックの映像史（オリンピックの記録映画（1912～2016））研究</u></p> <p>【第9回】スポーツする身体のパースペクティブ（身体史・身体観）（松浪）</p> <p><u>近代日本の身体表象（身体へのまなざし）／「ドーピング」の哲学（身体を超えて）</u></p> <p>【第10回】スポーツ・レジャー関与と情動について、<u>心理的指標・生理的指標を用いた研究計画の立案</u>（松本）</p> <p>【第11回】スポーツ・レジャー関与と動機づけについて、<u>心理的指標・生理的指標を用いた研究計画の立案</u>（松本）</p> <p>【第12回】スポーツ・レジャー関与とライフスタイルについて、<u>質的・量的な研究方法を用いた研究計画の立案</u>（松本）</p> <p>【第13回】スポーツ・レジャー関与と幸福感について、<u>質的・量的な研究方法を用いた研究計画の立案</u>（松本）</p> <p>【第14回】体育学における人文社会科学の可能性と人類の知の展望：総括的討議（隣接する分野（社会学・歴史学等）の専門家・学生と協同しパネルディスカッションによる意見交換を含む）（阿部・松浪・松本）</p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p><略></p> <p>【第10回】スポーツ・レジャー関与と情動（200分）</p> <p>予習：「高度スポーツ文化社会科学特講」のスポーツ心理学領域において学んだ<u>心理的指標・生理的指標を用いた最新の情動研究から研究計画の構想をまとめる</u>（100分）</p> <p>復習：情動に関する<u>研究計画を立案する</u>（100分）</p> <p>【第11回】スポーツ・レジャー関与と動機づけ（200分）</p> <p>予習：「高度スポーツ文化社会科学特講」のスポーツ心理学領域において学んだ、<u>心理的指標・生理的指標を用いた最新の動機づけ研究から研究計画の構想をまとめる</u>（100分）</p> <p>復習：動機づけに関する<u>研究計画を立案する</u>（100分）</p> <p>【第12回】スポーツ・レジャー関与とライフスタイル（200分）</p> <p>予習：「高度スポーツ文化社会科学特講」のスポーツ心理学領域において学んだ、<u>質的・量的な研究方法を用いた最新のライフスタイル研究から研究計画の構想をまとめる</u>（100分）</p>	<p>【第8回】スポーツのメディア表象（松浪）</p> <p>【第9回】スポーツする身体のパースペクティブ（身体史・身体観）（松浪）</p> <p>【第10回】スポーツ・レジャー関与と情動（松本）</p> <p>【第11回】スポーツ・レジャー関与と動機づけ（松本）</p> <p>【第12回】スポーツ・レジャー関与とライフスタイル変容（松本）</p> <p>【第13回】スポーツ・レジャー関与と幸福感（松本）</p> <p>【第14回】体育学における人文社会科学の可能性と人類の知の展望：総括的討議（阿部・松浪・松本）</p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p><略></p> <p>【第10回】スポーツ・レジャー関与と情動（200分）</p> <p>予習：スポーツ・レジャーの情動に関する論文を読みレジュメを作成する（100分）</p> <p>復習：情動に関する理解を深めレポートにまとめる（100分）</p> <p>【第11回】スポーツ・レジャー関与と動機づけ（200分）</p> <p>予習：スポーツ・レジャーの動機づけに関する論文を読みまとめる（100分）</p> <p>復習：動機づけに関する理解を深めレポートにまとめる（100分）</p> <p>【第12回】スポーツ・レジャー関与とライフスタイル変容（200分）</p> <p>予習：スポーツ・レジャーとライフスタイル変容の論文を読みまとめる（100分）</p>
---	--

<p>復習：ライフスタイルに関する研究計画を立案する（100分）</p> <p>【第13回】スポーツ・レジャー関与と幸福感（200分）</p> <p>予習：「高度スポーツ文化社会科学特講」のスポーツ心理学領域において学んだ質的・量的な研究方法を用いた最新の幸福感研究から研究計画の構想をまとめる（100分）</p> <p>復習：幸福感に関する研究計画を立案する（100分）</p> <p>【第14回】体育学における人文社会科学の可能性（200分）</p> <p>予習：自分の問題設定の位置価を踏まえ、当該問題領域の発展可能性について考えておくこと、隣接する分野（社会学・歴史学等の専門家・学生と協同したパネルディスカッション）による意見交換のための準備（100分）</p> <p>復習：現代の学問的潮流における自分の問題設定の意義について丁寧に整理することとともに、隣接する分野（社会学・歴史学等の専門家・学生と協同したパネルディスカッション）による意見交換を踏まえ、自分の研究テーマについて広い視点で俯瞰的に見直しを行う。（100分）</p>	<p>復習：ライフスタイル変容について理解を深めレポートにまとめる（100分）</p> <p>【第13回】スポーツ・レジャー関与と幸福感（200分）</p> <p>予習：スポーツ・レジャーと幸福感の論文を読みまとめる（100分）</p> <p>復習：幸福感に関する理解を深めレポートにまとめる（100分）</p> <p>【第14回】体育学における人文社会科学の可能性（200分）</p> <p>予習：自分の問題設定の位置価を踏まえ、当該問題領域の発展可能性について考えておくこと（100分）</p> <p>復習：現代の学問的潮流における自分の問題設定の意義について丁寧に整理すること（100分）</p>
--	---

（新旧対照表）シラバス「高度スポーツ医科学演習」

新	旧
<p>授業主旨または授業概要</p> <p>高度スポーツ医科学演習では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）の手法によるスポーツ科学実験研究のプロセス（計画→測定→処理→論議）を演習として学ぶ。これらを通じて、当該分野において、質の高い研究テーマ、研究デザイン、データの解釈・考察を行い、<u>修士課程で学修した内容を基礎に、博士課程後期としてふさわしい研究者としての学識や良識の錬磨と、論文執筆を遂行できる高度な研究スキルを身に付ける。</u>さらに、後半の共同の部分で、<u>医学、工学、理学等他分野が融合したプロジェクト研究に参加し、研究能力・成果を社会に還元する力を身につける。</u></p> <p>授業計画</p> <p>◆授業スケジュール</p> <p><略></p> <p>【第3回】<u>神経－筋系実習（筋電図2：等尺性運動、等速性運動、筋疲労と周波数解析）</u>（八田）</p>	<p>授業主旨または授業概要</p> <p>高度スポーツ医科学演習では、体育・スポーツ事象にみられる諸問題に対する体育学における自然科学的アプローチ（スポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス・体力学、スポーツ医学）の手法によるスポーツ科学実験研究のプロセス（計画→測定→処理→論議）を演習として学ぶ。これらを通じて、当該分野において、質の高い研究テーマ、研究デザイン、データの解釈・考察を行い、<u>研究者としての学識や良識の錬磨と、論文執筆を遂行できる高度な研究スキルを身に付ける。</u></p> <p>授業計画</p> <p>◆授業スケジュール</p> <p><略></p> <p>【第3回】<u>神経－筋系実習（筋電図2：等尺性運動、等速性運動）</u>（八田）</p>

<p>【第4回】Kinematics（運動学的解析）の先端的手法（山田）</p> <p>【第5回】Kinetics（力学的解析）の先端的手法（山田）</p> <p>【第6回】運動生理学の視点から、筋の構造と機能を測定する研究手法と、その理論的背景について学び、実践する。（内山）</p> <p>【第7回】運動生理学の視点から、ヒトの持久的な能力を測定する研究手法とその理論的背景について学び、実践する。（内山）</p> <p>【第8回】スポーツ医学、病態の把握のための評価方法（宮崎）</p> <p>【第9回】スポーツ医学、治療方法、<u>emergency care for sports</u>（宮崎）</p> <p>【第10回】<u>他分野融合プロジェクト研究 計画</u>（八田、山田、内山、宮崎）</p> <p>【第11回】<u>他分野融合プロジェクト研究 測定</u>（八田、山田、内山、宮崎）</p> <p>【第12回】<u>他分野融合プロジェクト研究 処理</u>（八田、山田、内山、宮崎）</p> <p>【第13回】<u>他分野融合プロジェクト研究 論議</u>（八田、山田、内山、宮崎）</p> <p>【第14回】<u>他分野融合プロジェクト研究 まとめ</u>（八田、山田、内山、宮崎）</p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p><略></p> <p>【第4回】Kinematics（運動学的解析）の先端的手法（200分）</p>	<p>【第4回】神経－筋系実習（筋電図3：筋疲労と周波数解析）（八田）</p> <p>【第5回】Kinematics（運動学的解析）の先端的手法（山田）</p> <p>【第6回】Kinetics（力学的解析）の先端的手法（山田）</p> <p>【第7回】バイオメカニクスデータの解釈、総合討論（山田）</p> <p>【第8回】運動生理学の視点から、筋の構造と機能を測定する研究手法と、その理論的背景について学び、実践する。（内山）</p> <p>【第9回】運動生理学の視点から、ヒトの持久的な能力を測定する研究手法とその理論的背景について学び、実践する。（内山）</p> <p>【第10回】運動生理学の視点から、ヒトの筋力発揮を測定する研究手法とその理論的背景について学び、実践する。（内山）</p> <p>【第11回】スポーツ医学、病態の把握のための評価方法（宮崎）</p> <p>【第12回】スポーツ医学、病態の把握と治療方法（宮崎）</p> <p>【第13回】スポーツ医学、<u>emergency care for sports</u>（宮崎）</p> <p>【第14回】発表・討議、授業総括（八田、山田、内山、宮崎）</p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p><略></p> <p>【第4回】神経－筋系実習（筋電図3）（200分）</p> <p>予習：筋疲労について調べておく。（100分）</p> <p>復習：筋疲労と周波数解析について、筋電図データをもとにレポートする。（100分）</p> <p>【第5回】Kinematics（運動学的解析）の先端的手法（200分）</p>
--	---

<p>予習：Kinematics の概要、研究について調べておく。(100分)</p> <p>復習：設定した研究テーマについて、Kinematics データ（身体合成重心、関節角度・角速度等）をもとにレポートする。(100分)</p> <p>【第5回】Kinetics（力学的解析）の先端的手法（200分）</p> <p>予習：Kinetics の概要、研究について調べておく。(100分)</p> <p>復習：設定した研究テーマについて、Kinetics データ（床反力、関節トルク、EMG 等）をもとにレポートする。(100分)</p> <p>【第6回】筋の構造と機能を測定する研究手法（200分）</p> <p>予習：運動生理学の視点から、筋の構造と機能について調べる。(100分)</p> <p>復習：筋の構造と機能を測定する研究手法と、その理論的背景について整理する。(100分)</p> <p>【第7回】ヒトの持久的な能力を測定する研究手法（200分）</p> <p>予習：運動生理学の視点から、人体の呼吸循環に関わる構造と構造を調べておく。(100分)</p> <p>復習：運動生理学の視点から、ヒトの持久的な能力を測定する研究手法とその理論的背景について整理する。(100分)</p> <p>【第8回】病態の把握のための評価方法（200分）</p> <p>予習：正常解剖・生理学・生化学の観点から病的状態について、議論ができるレベルまで学修する。(100分)</p> <p>復習：スポーツ現場への応用方法を考え、実践する。(100分)</p> <p>【第9回】病態の把握と治療方法（200分）</p> <p>予習：病的状態における治療を理解し、模範的な手技を議論ができるレベルまで学修する。(100分)</p> <p>復習：スポーツ現場への応用方法を考え、実践する。(100分)</p>	<p>予習：Kinematics の概要、研究について調べておく。(100分)</p> <p>復習：設定した研究テーマについて、Kinematics データ（身体合成重心、関節角度・角速度等）をもとにレポートする。(100分)</p> <p>【第6回】Kinetics（力学的解析）の先端的手法（200分）</p> <p>予習：Kinetics の概要、研究について調べておく。(100分)</p> <p>復習：設定した研究テーマについて、Kinetics データ（床反力、関節トルク、EMG 等）をもとにレポートする。(100分)</p> <p>【第7回】バイオメカニクスデータの解釈、総合討論（200分）</p> <p>予習：データサイエンスの概要、応用について調べておく。(100分)</p> <p>復習：得られた知見を社会に還元するための方策についてレポートする。(100分)</p> <p>【第8回】筋の構造と機能を測定する研究手法（200分）</p> <p>予習：運動生理学の視点から、筋の構造と機能について調べる。(100分)</p> <p>復習：筋の構造と機能を測定する研究手法と、その理論的背景について整理する。(100分)</p> <p>【第9回】ヒトの持久的な能力を測定する研究手法（200分）</p> <p>予習：運動生理学の視点から、人体の呼吸循環に関わる構造と構造を調べておく。(100分)</p> <p>復習：運動生理学の視点から、ヒトの持久的な能力を測定する研究手法とその理論的背景について整理する。(100分)</p> <p>【第10回】ヒトの筋力発揮を測定する研究手法（200分）</p> <p>予習：運動生理学の視点から、人体の筋力発揮に関わる構造を調べておく。(100分)</p> <p>復習：運動生理学の視点から、ヒトの筋力発揮を測定する研究手法とその理論的背景について整理する。(100分)</p> <p>【第11回】病態の把握のための評価方法（200分）</p> <p>予習：正常解剖・生理学・生化学の観点から病的状態について、議論ができるレベルまで学修する。(100分)</p> <p>復習：スポーツ現場への応用方法を考え、実践する。(100分)</p> <p>【第12回】病態の把握と治療方法（200分）</p> <p>予習：病的状態における治療を理解し、模範的な手技を議論ができるレベルまで学修する。(100分)</p> <p>復習：スポーツ現場への応用方法を考え、実践する。(100分)</p> <p>【第13回】emergency care for sports（200分）</p> <p>予習：emergency care の概念や方法を議論ができるレベルま</p>
---	--

<p>【第10回】<u>他分野融合プロジェクト研究 計画</u> (200分) 予習：これまで習得した研究方法の復習をする。(100分) 復習：授業で学んだプロジェクト研究の計画について復習する。(100分)</p> <p>【第11回】<u>他分野融合プロジェクト研究 測定</u> (200分) 予習：研究方法・プロジェクト研究の計画について復習する。(100分) 復習：授業で学んだプロジェクト研究の測定について復習する。(100分)</p> <p>【第12回】<u>他分野融合プロジェクト研究 処理</u> (200分) 予習：プロジェクト研究における計画・測定について復習する。(100分) 復習：授業で学んだプロジェクト研究におけるデータ処理について復習する。(100分)</p> <p>【第13回】<u>他分野融合プロジェクト研究 論議</u> (200分) 予習：プロジェクト研究における計画・測定・データ処理について復習する。(100分) 復習：授業で学んだプロジェクト研究の内容の議論を深める。(100分)</p> <p>【第14回】<u>他分野融合プロジェクト研究 まとめ</u> (200分) 予習：プロジェクト研究における計画・測定・処理・論議について復習する。プロジェクト研究に参加した結果について、自分の研究テーマと関連した「現状との差異や問題点」などについて発表・意見交換の準備 (100分) 復習：授業で学んだプロジェクト研究を復習し、発表・意見交換の結果を踏まえ、まとめる。(100分)</p>	<p>で学修する (100分) 復習：スポーツ現場への応用方法を考え、実践する (100分)</p> <p>【第14回】発表・討議、授業総括 (200分) 予習：これまで習得した研究スキルの復習、発表の準備。(100分) 復習：自然科学的なアプローチに関する総合的レポート。(100分)</p>
--	--

(新旧対照表) シラバス「高度実践スポーツ科学演習」

新	旧
<p>授業要旨または授業概要 高度実践スポーツ科学演習では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会において貢献しうる研究テーマや研究デザインを、具体的に考案する能力を養う。特に、ウェルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツをキーワードとして、それぞれの分野において、質の高い研究テーマや実現可能な研究デザインを立案し、ビジネスに応用するための最新情報を</p>	<p>授業要旨または授業概要 高度実践スポーツ科学演習では、スポーツや運動、身体活動が、現代社会において貢献しうる研究テーマや研究デザインを、具体的に考案する能力を養う。特に、ウェルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツをキーワードとして、それぞれの分野において、質の高い研究テーマや実現可能な研究デザインを立案し、ビジネスに応用するための最新情報を</p>

<p>取り扱う。加えて、対象領域の広い実践スポーツ科学分野の専門家となるため、<u>修士課程で学修した内容を基礎に、博士課程としてふさわしい学識や良識の錬磨を図り、自立した研究者になるための高度な研究スキルを身に付ける。また、実践スポーツ科学の担当教員が進めている研究プロジェクトや活動の内容を理解するとともに参加して、中核的に研究に携わることで、博士論文のテーマについての研究を深めていく。</u></p>	<p>取り扱う。加えて、対象領域の広い実践スポーツ科学分野の専門家として、<u>学識や良識の錬磨と高度な研究スキルを身に付ける。</u></p>
<p>授業計画</p>	<p>授業計画</p>
<p>◆授業スケジュール</p>	<p>◆授業スケジュール</p>
<p>【第1回】<u>ウエルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツに関して、現代社会における課題に具体的に貢献するための、質の高い研究テーマや実現可能な研究デザインの概略を理解する。また、実践スポーツ科学の担当教員が取り組むプロジェクトや活動の概要を理解する。</u>(久保田、萩、野坂、吉岡)</p>	<p>【第1回】<u>ウエルネス、スポーツ・レジャーマネジメント、健康づくり・介護予防の身体活動、アダプテッド体育・スポーツに関して、現代社会における課題に具体的に貢献するための、質の高い研究テーマや実現可能な研究デザインの概略を理解する</u>(久保田、萩、野坂、吉岡)</p>
<p>【第2回】<u>担当教員が取り組む健康づくりのための身体活動促進のプロジェクト(近隣環境の活用による身体活動の促進)の内容を理解し、参加できることを検討する。</u>(久保田)</p>	<p>【第2回】<u>健康づくりの身体活動に関連する研究テーマ、研究方法を立案する</u>(久保田)</p>
<p>【第3回】<u>担当教員が取り組む介護予防のための身体活動促進のプロジェクト(社会参加の活用による身体活動の促進)の内容を理解し、参加できることを検討する。</u>(久保田)</p>	<p>【第3回】<u>介護予防の身体活動に関連する研究テーマ、研究方法を立案する</u>(久保田)</p>
<p>【第4回】<u>担当教員が取り組む健康づくり・介護予防のための身体活動促進プロジェクトへの具体的な参加内容を検討、調整する。</u>(久保田)</p>	<p>【第4回】<u>健康づくり・介護予防の身体活動に関連する研究テーマ、研究方法の質を高める工夫について学修する</u>(久保田)</p>
<p>【第5回】<u>スポーツ・レジャーマネジメントの今日的課題である多職種との連携について、スポーツイベントの現場を体験し、アクションリサーチの手法を用いて、連携の在り方や方法を考察し、課題解決に向けた提案を行う。</u>(萩)</p>	<p>【第5回】<u>スポーツマネジメントの今日的課題及びスポーツ・レジャーの社会貢献について発表する</u>(萩)</p>
<p>【第6回】<u>スポーツ・レジャーの社会貢献について、企業や団体の取り組みを取材して情報収集し、どのようなマネジメントが行われているのか、PDCAサイクルの観点からまとめ発表する。</u>(萩)</p>	<p>【第6回】<u>スポーツマネジメントに関連する研究テーマを選び、研究方法を立案し発表する</u>(萩)</p>
<p>【第7回】<u>現場における課題を踏まえたうえで、スポーツ・レジャーが社会に貢献できる研究テーマを選び、量的アプローチと質的アプローチの研究デザインを立案し発表する。</u>(萩)</p>	<p>【第7回】<u>スポーツ・レジャーに関連する研究テーマを選び、研究方法を立案し発表する</u>(萩)</p>
<p>【第8回】<u>ハルバート・ダンの“High Level Wellness”が発刊された時代的背景について議論する。すなわち、WHOの示す「健康」の定義を「幻想」とするルネ・デュボスの主</u></p>	<p>【第8回】<u>健康・保健に関連する概念とそれを取り巻く論理について報告・議論する</u>(野坂)</p>

<p><u>張を探求し、わが国の健康増進施策がウェルネスに近似して</u> <u>いく経過をまとめ、今後の方策の方向性に対するついて議論</u> <u>する（野坂）</u></p> <p>【第9回】<u>「日本ウェルネス学会」および「日本保健科教育学会」のWeb会議を聴講する、あるいは両学会の役員をゲスト</u> <u>に招き、それぞれの立場における「ウェルネス」、「健康」、「保</u> <u>健」の捉え方について議論する（野坂）</u></p> <p>【第10回】<u>全米ウェルネス会議国際委員会のWeb会議を聴</u> <u>講する、あるいはその役員をゲストに招き、ウェルネスや他</u> <u>の健康関連指標等に関してウェブ上で議論し、今後の方向性</u> <u>について示唆を得る（野坂）</u></p> <p>【第11回】<u>担当教員が取り組む発達障害児者のスポーツ教室</u> <u>における課題を分析し、実践研究テーマを考え、先行研究の</u> <u>検討をもとにテーマの背景を発表する。（吉岡）</u></p> <p>【第12回】<u>11回目で考えた研究テーマについて研究デザイ</u> <u>ンを立案、発表し、内容について議論する。（吉岡）</u></p> <p>【第13回】<u>12回目で立案した研究をスポーツ教室で実践し、</u> <u>問題点を踏まえた研究デザインの改善に取り組む。（吉岡）</u></p> <p>【第14回】<u>発表・討議、授業総括、プロジェクト研究に参加</u> <u>した結果について、自分の研究テーマと関連した「現状との</u> <u>差異や問題点」などについて発表・意見交換（久保田、萩、</u> <u>野坂、吉岡）</u></p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p><略></p> <p>【第2回】<u>健康づくりの身体活動に関する研究方法の立案</u> <u>（200分）</u></p> <p>予習：<u>担当教員が取り組む健康づくりのための身体活動促進</u> <u>のプロジェクトに関連する研究成果を調べて整理しておく。</u> <u>（100分）</u></p> <p>復習：<u>担当教員が取り組む健康づくりのための身体活動促進</u> <u>のプロジェクトで参加可能な研究テーマや役割を整理して</u> <u>おく。（100分）</u></p> <p>【第3回】<u>介護予防の身体活動に関する研究方法の立案（200</u> <u>分）</u></p> <p>予習：<u>担当教員が取り組む介護予防のための身体活動促進の</u> <u>プロジェクトに関連する研究成果を調べて整理しておく。</u> <u>（100分）</u></p>	<p>【第9回】<u>人類の幸福に向けた健康の考え方について発案し</u> <u>議論する（野坂）</u></p> <p>【第10回】<u>教育機関における健康・保健の位置と歴史及び今</u> <u>後の教育機関において健康・保健はどのように扱われるべき</u> <u>か、意見を報告・議論する（野坂）</u></p> <p>【第11回】<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の研究テーマを</u> <u>選択し、先行研究から方法と課題を検討する（吉岡）</u></p> <p>【第12回】<u>選択したアダプテッド体育・スポーツ分野の研究</u> <u>テーマについて、先行研究の検討をもとに研究方法を立案、</u> <u>発表し、内容について議論する（吉岡）</u></p> <p>【第13回】<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の研究について、</u> <u>今後のアプローチを検討する（吉岡）</u></p> <p>【第14回】<u>発表・討議、授業総括（久保田、萩、野坂、吉岡）</u></p> <p>授業計画</p> <p>◆予習・復習</p> <p><略></p> <p>【第2回】<u>健康づくりの身体活動に関する研究方法の立案</u> <u>（200分）</u></p> <p>予習：<u>健康づくりの身体活動に関連する研究で、興味のある</u> <u>いくつかの研究の内容を説明できるように取りまとめる（100</u> <u>分）</u></p> <p>復習：<u>健康づくりの身体活動に関する研究デザインを立案す</u> <u>る（100分）</u></p> <p>【第3回】<u>介護予防の身体活動に関する研究方法の立案（200</u> <u>分）</u></p> <p>予習：<u>介護予防の身体活動に関連する研究で、興味のあるい</u> <u>くつかの研究の内容を説明できるように取りまとめる（100</u> <u>分）</u></p>
--	---

<p>復習：<u>担当教員が取り組む介護予防のための身体活動促進のプロジェクトで参加可能な研究テーマや役割を整理しておく。</u> (100分)</p> <p>【第4回】健康づくり・介護予防研究の質を高める工夫 (200分)</p> <p>予習：<u>第2回、第3回の復習を確認して、プロジェクトに参加できること、課題解決に向けた提案を整理しておく。</u> (100分)</p> <p>復習：<u>プロジェクト参加までに必要となる情報、具体的なスケジュールを整理する。</u> (100分)</p> <p>【第5回】スポーツ・レジャーの現場における課題の抽出 (200分)</p> <p>予習：<u>スポーツイベントの現場を体験し、アクションリサーチの手法を用いて現場の課題をまとめる。</u> (150分)</p> <p>復習：<u>連携の在り方や方法を考察し、課題解決に向けた提案をまとめる。</u> (50分)</p> <p>【第6回】スポーツ・レジャーの社会貢献について (200分)</p> <p>予習：<u>スポーツ・レジャーの社会貢献について、企業や団体の取り組みを取材して情報収集する。</u> (100分)</p> <p>復習：<u>企業や団体の取り組みを PDCA サイクルの観点からまとめる。</u> (100分)</p> <p>【第7回】現場からみたスポーツ・レジャー研究の立案 (200分)</p> <p>予習：<u>スポーツ・レジャーが社会に貢献できる研究テーマを考えてくる。</u> (100分)</p> <p>復習：<u>量的アプローチと質的アプローチの研究デザインの特徴をまとめる。</u> (100分)</p> <p><略></p> <p>【第9回】人類の幸福と健康 (200分)</p> <p>予習：<u>「日本保健科教育学会」のウェブサイトから、その歴史や活動内容を調べてまとめる</u> (100分)</p> <p>復習：<u>わが国の施策における「健康」や、学校教育における「保健」の今後について考察してまとめる</u> (100分)</p> <p>【第10回】教育機関における健康・保健の展開と健康・保健教育の未来 (200分)</p> <p>予習：<u>わが国の施策における「健康」や、学校教育における「保健」について、簡単な英語で説明できるようにする</u> (100分)</p>	<p>復習：介護予防の身体活動に関する研究デザインを立案する (100分)</p> <p>【第4回】健康づくり・介護予防研究の質を高める工夫 (200分)</p> <p>予習：健康づくり・介護予防の身体活動に関連する研究で、興味のあるいくつかの研究の内容を説明できるように取りまとめる (100分)</p> <p>復習：健康づくり・介護予防の研究デザインの質を高める工夫についてまとめる (100分)</p> <p>【第5回】スポーツマネジメントの今日的課題とスポーツ・レジャーの社会貢献 (200分)</p> <p>予習：スポーツマネジメントの今日的課題とスポーツ・レジャーの社会貢献についての情報をまとめて発表の準備を行う (150分)</p> <p>復習：発表後のディスカッションを踏まえ発表内容をまとめる (50分)</p> <p>【第6回】スポーツマネジメントに関する研究方法の立案 (200分)</p> <p>予習：スポーツマネジメントに関する研究で、興味のあるいくつかの研究の内容を説明できるように取りまとめる (100分)</p> <p>復習：スポーツマネジメントに関する研究デザインを立案する (100分)</p> <p>【第7回】スポーツ・レジャーに関する研究方法の立案 (200分)</p> <p>予習：スポーツ・レジャーに関する研究で、興味のあるいくつかの研究の内容を説明できるように取りまとめる (100分)</p> <p>復習：スポーツ・レジャーに関する研究デザインを立案する (100分)</p> <p><略></p> <p>【第9回】人類の幸福と健康 (200分)</p> <p>予習：健康と幸福との関連性・相違性について、個人的・社会的価値観を含めた情報を整理し、報告の準備をする (100分)</p> <p>復習：議論の結果をまとめ、報告内容を修正してまとめる (100分)</p> <p>【第10回】教育機関における健康・保健の展開と健康・保健教育の未来 (200分)</p> <p>予習：教育機関において健康や保健がどのように扱われ展開してきたのか、今後の教育機関において健康や保健がどのよ</p>
--	---

<p>分)</p> <p>復習：<u>ウェルネスや健康関連指標は国内外において今後どのように展開されるのか考察してまとめる</u> (100分)</p> <p>【第11回】<u>アダプテッド体育・スポーツの実践研究テーマの立案</u> (200分)</p> <p>予習：<u>発達障害児者のスポーツ教室に参加し、発見した課題に基づく研究テーマを背景とともにまとめる</u>。(100分)</p> <p>復習：<u>研究テーマについて再考し、背景とともにまとめ直す</u>。(100分)</p> <p>【第12回】<u>実践研究デザインの立案と発表</u> (200分)</p> <p>予習：<u>11回目で考えた研究テーマについて具体的な研究デザインを立案し、発表の準備をする</u>。(100分)</p> <p>復習：<u>研究デザインを再考し、まとめ直す</u>。(100分)</p> <p>【第13回】<u>研究の実践と改善の検討</u> (200分)</p> <p>予習：<u>12回目で考えた研究デザインをスポーツ教室で実践する準備をする</u>。(100分)</p> <p>復習：<u>実践から発見した問題点を踏まえた研究デザインの改善点をまとめ、レポートを作成する</u>。(100分)</p> <p>【第14回】<u>発表・討議、授業総括、プロジェクト研究に参加した結果について、自分の研究テーマと関連した「現状との差異や問題点」などについて発表・意見交換</u> (200分)</p> <p>予習：<u>これまで習得した研究スキルの復習、発表の準備</u>。(100分)</p> <p>復習：<u>授業で学んだプロジェクト研究を復習し、発表・意見交換の結果を踏まえ、研究スキルに関する総合的レポート</u>。(100分)</p>	<p>うに展開すべきなのか意見をまとめ、報告の準備をする (100分)</p> <p>復習：議論の結果をまとめ、報告内容を修正してまとめる (100分)</p> <p>【第11回】<u>アダプテッド体育・スポーツの研究に関する研究方法の立案</u> (200分)</p> <p>予習：<u>アダプテッド体育・スポーツの研究から興味あるテーマの先行研究をいくつか検索し、内容についてまとめる</u> (100分)</p> <p>復習：<u>選択したテーマの先行研究について研究方法と課題をまとめ、研究デザインを立案する</u> (100分)</p> <p>【第12回】<u>アダプテッド体育・スポーツの研究に関する研究方法の立案</u> (200分)</p> <p>予習：<u>アダプテッド体育・スポーツの研究から興味あるテーマの先行研究をいくつか検索し、内容についてまとめる</u> (100分)</p> <p>復習：<u>選択したテーマの先行研究について研究方法と課題をまとめ、研究デザインを立案する</u> (100分)</p> <p>【第13回】<u>アダプテッド体育・スポーツの研究の質を高める工夫</u> (200分)</p> <p>予習：<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の研究における課題をまとめる</u> (100分)</p> <p>復習：<u>アダプテッド体育・スポーツ分野の研究を促進するためのアプローチについてまとめる</u> (100分)</p> <p>【第14回】<u>発表・討議、授業総括</u> (200分)</p> <p>予習：<u>これまで習得した研究スキルの復習、発表の準備</u>。(100分)</p> <p>復習：<u>研究スキルに関する総合的レポート</u>。(100分)</p>
---	--

(是正事項) 体育学研究科 体育学専攻 (D)

6. <研究指導・博士論文審査体制が不明確>

研究指導や博士論文の審査体制において、研究指導教員の決定基準や決定の主体や博士論文の審査に当たる主査の決定基準等が示されていない。また、博士論文審査は学位規程に基づいて実施する旨記載があるが、資料が提出されていない。研究指導・博士論文審査に関係する規程等の資料を提出した上で、これらの点について具体的に説明すること。

(対応)

審査意見に対して、次の通り説明する。

【研究指導教員の決定基準】

研究指導教員の決定は、入学試験時において受験者から申告された希望に基づき、入学手続きの完了後、当該大学院生の研究計画と希望のあった当該教員の研究分野の妥当性について研究科教授会で検討し、その審議を経たうえで決定される。当該大学院生に対しては、入学時のガイダンスにおいて決定が通知される。

【博士論文の審査に当たる主査の決定基準】

博士論文の審査に当たる主査は、博士論文の審査を行う審査委員会の審査委員から選出される。

主査決定の手続きは、まず、研究科教授会が審査委員会の審査委員の候補案を作成し、審議・承認したうえで大学院運営委員会へ提出する。大学院運営委員会は、候補案について審議し、承認した内容に基づいて、学長が候補者を指名して決定される。

審査委員会が発足した後、審査委員会において、①当該大学院生の研究指導教員は除外すること、②当該大学院生の博士論文の研究分野と同一もしくは隣接する分野を専門とする者であること、③審査委員会全体を取りまとめる学識と経験を有する者を基準として選出が行われ、主査が決定する。

以上の内容について「設置の趣旨等を記載した書類」に追記するとともに、「東海大学学位規程」を添付する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 17～19 ページ

新	旧
4) 入学から修了までの履修指導及び研究指導 (1) 履修指導 <略> ガイダンスでは、博士課程後期の教育理念・目的・目標、教育課程の編成方針、時間割、履修方法、研究計画、博士論文の提出時期・審査時期・審査方法、最終試験等に関する説明を行い、 <u>研究指導教員の決定が通知される。</u> <u>なお、研究指導教員の決定は、入学試験時において受験者から申告された希望に基づき、入学</u>	4) 入学から修了までの履修指導及び研究指導 (1) 履修指導 <略> ガイダンスでは、博士課程後期の教育理念・目的・目標、教育課程の編成方針、時間割、履修方法、研究計画、博士論文の提出時期・審査時期・審査方法、最終試験等に関する説明を行い、 <u>研究指導教員を決定する。</u>

<p><u>手続きの完了後、当該大学院生の研究計画と希望のあった当該教員の研究分野の妥当性について研究科教授会で検討し、その審議を経たうえで決定される。</u></p> <p><略></p> <p>5) 博士論文の審査体制</p> <p><u>博士論文の審査は、本学の学位規程(資料5:「東海大学学位規程」)に定めるほか、以下の手続きにより進める。</u></p> <p><略></p> <p>(2) 審査委員の指名</p> <p><u>学位の申請を受け、研究科教授会が審査委員会の審査委員の候補案を作成し、審議・承認したうえで大学院運営委員会へ提出する。大学院運営委員会は、候補案について審議し、承認した内容に基づいて、学長が候補者を指名して決定される。</u></p> <p>なお、論文の審査にあたって大学院運営委員会が必要と認めるときは、学長は他の大学院又は研究所等の教員等を前項の委員の中に含めることができる。</p> <p>(3) 審査委員会</p> <p>指名された審査委員は、審査委員会を構成し、主査を選出する。</p> <p>審査委員会は、博士論文に関連ある科目の担当教員2名以上を含め、総計5名以上で構成される。</p> <p><u>なお、主査は、博士論文の審査を行う審査委員会の審査委員から選出される。審査委員会が発足した後、審査委員会において、①当該大学院生の研究指導教員は除外すること、②当該大学院生の博士論文の研究分野と同一もしくは隣接する分野を専門とする者であること、③審査委員会全体を取りまとめる学識と経験を有する者を基準として選出が行われ、決定される。</u></p>	<p><略></p> <p>5) 博士論文の審査体制</p> <p>博士論文の審査は、本学の学位規程に基づいて以下の通り進める。</p> <p><略></p> <p>(2) 審査委員の指名</p> <p>学位の申請を受け、学長は大学院運営委員会の議を経て、その博士論文を審査すべき委員を指名する。なお、論文の審査にあたって大学院運営委員会が必要と認めるときは、学長は他の大学院又は研究所等の教員等を前項の委員の中に含めることができる。</p> <p>(3) 審査委員会</p> <p>指名された審査委員は、審査委員会を構成し、主査を選出する。</p> <p>審査委員会は、博士論文に関連ある科目の担当教員2名以上を含め、総計5名以上で構成される。</p>
--	---

以上